

実践女子大学所蔵 源氏物語・和歌コレクション展 ―文庫をひらく―

(開催期間 二〇二四年九月九日～九月二十九日)

展示品解題

舟見一哉¹ 上野英子² 軽部利恵³ 中村仁美⁴ 新村唯⁵

- 1 実践女子大学 文学部 国文学科 准教授 (funami-kazuya@jissen.ac.jp)
- 2 実践女子大学 文芸資料研究所 教授
- 3 実践女子大学 文学部 国文学科 助教
- 4 実践女子大学 文学部 研究科 国文学専攻 博士前期課程
- 5 実践女子大学 文学部 国文学科 学部四年

〈注記 2024/09/20〉

本解題は、本年度末発行『実践女子大学文芸資料研究所 年報』に掲載予定である。論文等に引用する際には、そちらをご利用頂きたい。最新版解題は下のQRコードからダウンロードできる。

はじめに



本稿は「実践女子大学所蔵 源氏物語・和歌コレクション展 ―文庫をひらく―」の展示品解題である。解題に先立ち、本学の文庫のうち日本古典文学関連の貴重書を保管する文庫について略述する。詳細は本学図書館サイト「特殊コレクション紹介」を参観されたい。

● **山岸文庫**……本学元学長である山岸徳平博士の旧蔵書で、日本古典籍六三二一点、漢籍七五一点を所蔵。日野キャンパスにて保管。『山岸徳平文庫目録 日本漢詩文・儒学』、『山岸徳平文庫目録 仏書・儒学補遺』、『山岸徳平文庫目録 国書』が本学機関リポジトリにて公開中。

● **常磐松文庫**……文庫名は三谷栄一博士（元本学教授、図書館長）による命名。本学が戦後に収集した貴重書群。和歌、物語、国語学、香道、料理本など多岐にわたる。日野キャンパスにて保管。随時増加しており、目録は現時点では未完成。

● **黒川文庫**……黒川春村、真頼、真道の黒川家三代の旧蔵書。黒川家旧蔵書は分野別に諸機関に分蔵されており、本学には「物語・随筆」の資料を収蔵。今回展示ができなかったが古活字版『源氏物語』などの貴重書を有する。日野キャンパスにて保管。目録に『実践女子大学図書館所蔵黒川文庫目録【新版】』（文芸資料研究所編、2022）がある。

● **文芸資料研究所**……実践女子大学創立八〇周年記念事業のひとつとして一九七九年に創設。『源氏物語』関連資料と近代草稿類の収集と調査、本学所蔵資料について調査を行う研究機関。収蔵品は渋谷キャンパスにて保管。二〇〇〇年までの収蔵品については、野村精一 [2000]「研究所蔵書解題」『文芸資料研究所 別冊年報』Ⅳを参照されたい。

● **近世文芸資料**……守隨憲治博士（本学名誉教授）の協力のもと収集された近世の俳諧、随筆、地誌、歌舞伎、浄瑠璃関係の資料群。日野キャンパスにて保管。

解説の記述ルールを以下に説明する。展示番号と対応する「#」のあとに記した資料名は、資料を同定しやすいように国書データベースの「統一書名」としている。そのため、書名（内題に

基づく」とは異なる場合がある。資料名が判然としないものは亀甲パーレン〇を付した。なお一部の資料については国書データベースの著作〇を示した。

書誌事項は、以下の項目を、以下の順番で記述しているが、適宜省略したものもある。装訂、巻数・冊数、書写年（推定書写年は〇）を付す）、書写者・伝称筆者、書型・大きさ（縦・横、糹）、字高、改装か否か、表紙・見返し、外題、内題、料紙、一面行数・和歌一首行数、奥書・識語、印記（ただし本学の印記については略）、箱、極札・折紙などの付属品。なお、括りの数や一括りあたりの紙数、墨付丁数、遊紙の数などは今回割愛した資料がある。虫損などで読めない箇所は□・■で示した。

書誌事項の後の「▼」以降が解説である。末尾に執筆者名を記す。

（舟見）

第一章 『源氏物語』の写本たち

#1 伝冷泉為相筆 源氏物語切（桐壺巻、六半切） 一葉

本学国文学科所蔵（913.36/R25）。軸装一幅。（鎌倉時代末期～南北朝期頃）写。伝冷泉為相筆（函書の記述による）。縦16・8×横16・5糹。字高15・1糹程。楮紙打紙。一面行数10行。函ウハ書「色紙 冷泉家為相卿正毫 朝倉茂入極札有／短尺 櫛笥殿隆胤卿真毫 古筆勘兵衛極有」、函底書「安永七年（戊／戌）十一月日」、側面「冷泉為家相／櫛司隆胤／両卿和歌」「第九十二号」「秋」、「色紙短冊／冷泉家／櫛笥殿」、函蓋裏「小笠原家蔵」（朱陽短辺正方印）。

▼函ウハ書に書かれている極札類は現在ない。『源氏物語断簡集成』（第1部・15）所収の「伝為相筆源氏物語切（桐壺）」はツレか。筆跡は為相筆ではない。特筆すべき本文の特徴は見出せない。なお下部に櫛司隆胤筆と伝える短冊（無署名）を貼る。『源氏物語 古筆の世界』（武蔵野書院、2023）未収録。（舟見）

#2 『源氏物語』 末摘花巻 伝二条為定筆

常磐松文庫蔵（913.36/N73）。列帖装。一帖。（鎌倉時代末期～南北朝期頃）写。伝二条為定筆（極札による）。縦16・0×横14・8糹。字高14・5糹程。和歌は1・0糹ほど地の文より下げて二行書きとし、和歌の終わりは改行して地の文を続ける。改装金欄緞子紺鼠地牡丹唐草文様、見返しは金箔押。外題なし（ただし原表紙と目される第一丁の左端に打付墨書「すへつむ」、本文とは別筆、また中央やや上部に周囲とは変色具合の異なる長方形の跡がある）。墨付44丁、遊紙3丁。内題なし。楮紙打紙。一面10行、和歌一首2行書。奥書・識語なし。箱は近代製の桐函のみ。函ウハ書「源氏物語 末摘花 伝二条為定筆 鎌倉末期寫」。極札「末摘花 二条家為定卿／おもへとも（琴山）」（古筆了意、藍色雲紙、二丁ウに糸で縫い付ける）、裏面は画像参照。



▼僚卷やツレの古筆切については不明。筆跡は為定筆ではない。朱による句点があり、それと同色で本文に対して注記する箇所もある。例えば「御車よせたるなか（中歟）もの」など。また本文と同筆かと思われる墨筆で「普賢菩薩のり物見ゆ（おほイ）」と他本本文を注記する箇所が一箇所、他に本文よりやや薄い墨筆で「かるらかならぬ人の御ほとを心くるしとて（とそ）おほしける」のように本文を修正する箇所もある。本文系統については旧所蔵関の解説以来、定家本系統と指摘されている。（舟見）

＊参考文献『大阪青山短期大学創立二十周年記念所蔵展観目録』（一九八七）

#3 『源氏物語』 須磨巻 伝冷泉為相筆¹

常磐松文庫蔵（913.36/Mu56）。列帖装。一帖。（鎌倉時代末期～南北朝期頃）写。伝冷泉為相筆（極札による）。縦16・6×横15・5糎。字高14・8糎程。和歌は0・8糎ほど地の文より下げて書きはじめ、和歌の終わりは改行せず地の文を続ける。改装金地金欄綴子表紙、見返しは布目金箔押。外題は改装表紙中央に、紙片（8・0×2・5糎）に墨書「すま」（本文別筆、本文料紙とは異なり雁皮系か。原表紙にあったものか）。五括、第一括から第四括まで六紙からなる。第五括は二紙。墨付48丁。内題なし。楮紙打紙。一面行数11行。和歌一首1行書。奥書・識語なし。印記なし。外箱は近代製の漆塗箱に金泥で「源氏物語／須磨」と打付書。内箱は桐製で打付墨書「源氏物語 須磨／為相卿筆」。大倉好斎極札オモテ「中院為相卿（汲水）」、ウラ「六半須磨一冊 辛巳秋（昔斎）」。

▼僚卷やツレの古筆切については不明。筆跡は為相筆ではなく、#1、#4とも別筆。本文別筆による墨筆の校異あり。本文は旧所蔵機関の解説に「青表紙本や河内本とも共通する面も持つ一方では、別本と思われる性質を有するなど複雑な本文といえる」とある。（舟見）

＊参考文献『大阪青山短期大学所蔵品図録 第一輯』（一九九二年）

#4 『源氏物語』 早蕨・宿木巻 伝冷泉為相筆

山岸文庫蔵（A839）。列帖装。一帖。（鎌倉時代末期～南北朝期頃）写。伝冷泉為相筆（極札による）。縦24・4×横15・4糎。字高21・2糎程。和歌は1・0糎ほど地の文より下げて書きはじめ、和歌の終わりは改行せず地の文を続ける。改装綴子表紙、見返しは布目金箔押。外題なし。内題はないが、前遊紙1丁オモテに「うち さわらひ やとり木」と記す（本文別筆か）。七括、第一括五紙、第二括一一紙、第三括一三紙、第四～六括一二紙、第六括一二紙、第七括五紙。楮紙打紙。一面行数8行。和歌一首1行書。奥書・識語なし。印記「月明荘」。桐製外函ウ八書「河内本 源氏物語」（墨筆）、漆塗内函ウ八書「為相卿筆 源氏物語 〈早蕨／宿木〉」（金泥）。極札包紙表墨書「冷泉相卿改札」、包紙裏墨書「紙數百四拾貳枚之内／百三十七枚墨付／五枚白帄」、極札「冷泉殿元祖為相卿 源氏物語 宇治十帖内／さわらひ／やとり木（印）」（朝倉茂入・初代）。なお前遊紙の左端に剥離後があり、その大きさはこの極札と一致する。

¹ 当該本につき出品リストでは「初公開」と記したが公開したことがあるとのご指摘を受けた。その際に展示に関わった先生に深くお詫び申し上げる。そのときの解説が見つからないため、以下の書誌事項は私に調査したことを記す。

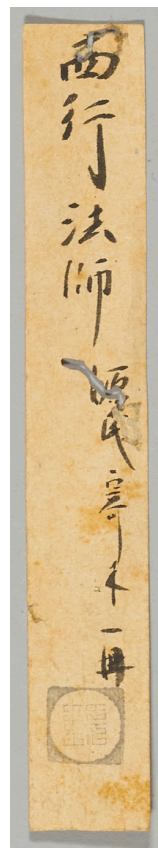
▼僚卷やツレの古筆切については不明。筆跡は為相筆ではなく、#1、#3とも別筆。朱による句点あり。本文については「いわゆる青表紙本と河内本の混成本文らし」と指摘されている。書写年代はこれまで鎌倉時代とされ、今回も「〔鎌倉時代末期〕南北朝頃」としているが、南北朝期の書写とみるのが妥当であろう。
(舟見)

*参考文献『実践女子大学所蔵貴重書図録』（実践女子学園、二〇二〇年）

#5 伝西行筆 源氏物語切（宿木巻） 二葉

文芸資料研究所蔵。軸装一幅、二葉を貼付。（鎌倉時代末期～南北朝頃）写。桐函ウハ書「西行法師筆 源氏物語やとりき」。

▼書誌の詳細や解説は、『源氏物語 古筆の世界』（武蔵野書院、2023）の228と229、およびコラム「西行の古筆切」を参照されたい。天理大学天理図書館蔵「宿木」残欠本のツレである。コラムで触れた、本展示品に付属する極札の画像を掲載する。古筆切に添付された極札にも関わらず、「宿木一冊」と書かれている点がポイント。
(舟見)



#6 〔明融本源氏物語〕

山岸文庫蔵（204・貴重書庫室）。列帖装。44帖（存空蟬・夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀・葵・賢木・須磨・明石・濡標・蓬生・関屋・絵合・松風・薄雲・朝顔・少女・玉鬘・初音・蛩・常夏・篝火・野分・行幸・藤袴・真木柱・梅枝・藤裏葉・横笛・鈴虫・夕霧・御法・幻・勾宮・紅梅・竹河・椎本・総角・早蕨・宿木・東屋・蜻蛉・手習・夢浮橋）※東海大学桃園文庫には、該書とも一具であったとみられる9帖があるが、両者を合わせても胡蝶を欠く。（室町時代後期（天正一〇年以前））写。明融ほかの寄合書き。縦約22・0×横約14・5糎。字高19・2糎。芥子色空押し草花散らし雷文繋ぎ地紙表紙。外題は後補の白地題簽に巻序と巻名のみ墨書。内題なし。料紙は雁皮主体・楮・また打紙仕様の有無など、巻によって様々。一面10行書。奥書なし。桃園文庫本8帖（花散里を除く）の巻末にみえる定家の勘物「奥入」も、展示品には見えない。印記は「山岸文庫」（複郭朱文長方印）。紺色無地詠帙入り（帙題簽無し）。極札は、計25冊に「上冷泉殿為和卿御息明融」「此付紙ヨリ奥明融御筆」等の琴山印の極札を貼付。他に、同じく琴山印極札として「梶井殿」（若紫）・「飛鳥井殿」（少女）・「伏見殿邦 高親王」（常夏）・「正親町殿公叙卿」（野分）・「飛鳥井殿二楽息曾衣」（行幸）・「連歌師 寿慶息（名字失念し候）」（総角）・「連歌師宗養」（手習）・「大覚寺殿義俊」（夢浮橋）の8冊があり、琴山印がなく筆跡・紙質も異なる筆者札として「栄雅ノ娘」（宿木）がある。

▼上冷泉為和の庶子明融は、永正一三年（1516）以前に生まれ、天正一〇年（1582）に没した戦国時代の時衆僧である。室町幕府の滅亡を体験しており、時代的には三条西家源氏学を興した実隆の嫡孫実枝のそれと重なる。歌人として古典学者としての実枝の活躍は著しいが、明融もま

た冷泉家出身の歌僧としての活動を行い、時衆のトップ（遊行三三世他阿）には古今伝受も行った。

かかる明融が大きく関与して完成したとみられるのが、伝明融等筆源氏物語である。明融本は現在、東海大学桃園文庫と本学山岸文庫とに分蔵されており、池田亀鑑は桃園文庫本8帖（除花散里）を、定家本の本文を忠実に伝える本文として高く評価した。たしかにこの8帖は定家本を臨模した柏木巻を含み、「奥入」を有し、部分的であっても定家様を残している。一方で、明融の父冷泉為和は自家に伝わる定家本を定家様で書写し他人に贈っていた。推測するに、この桃園文庫本8帖就中柏木は、冷泉家に伝わる定家本を為和の方法を真似て書写しようとしたものではなかったか。

これに対して山岸文庫本（と桃園文庫本の花散里）は片面10行に均して書写しており、寄合書きのメンバーもその書式を守っている（但し宿木巻最終3丁は例外）。

とはいえ、書型が一致し、明融が双方で書写を担当していること。双方共に明融が他筆者と共同で一冊を仕上げたという帖が確認できること。桃園文庫本の「雁皮主体、楮まじり（の斐紙）」という料紙と同様の料紙が山岸文庫本中にも一部確認できることなどから、当初から五四帖の揃いの取混ぜ本として作成されていた可能性も高いように思われる。明融は底本の相違によって書写方法を変えていたということではなからうか。

山岸文庫本の料紙を高精細デジタル顕微鏡で観察すると、用いられている本文料紙が一樣でないことが解る。普通ならば揃い本は料紙も統一するものだが、戦国時代の一僧侶には同一品質の料紙を大量に揃えることが叶わず、僧坊に寄進された料紙などを利用したからだろうか。また明融本には本文訂正や注釈など、複数の筆による様々な書き入れも加わっており、その一部は桃園文庫本にも見られる。什物として永く保管するために作成されたのでは無く、学習用テキストとして複数の人々に用いられてきた写本だったようである。（上野）

*参考文献

- 池田亀鑑 [1956] 「青表紙本の形態と性格」（『源氏物語大成 研究資料篇』中央公論社）
井上宗雄 [1972] 『中世歌壇史の研究 室町後期』（明治書院）
川平ひとし [2008] 「冷泉為和相伝の切紙ならびに古今和歌集藤沢相伝について」（『中世和歌テキスト論—定家へのまなざし—』笠間書院）
上野英子 [2020] 「明融本源氏物語を通して覗く室町期寄合書きの一実態」（『源氏物語 本文研究の可能性』和泉書院）
同 [2023] 「明融と打紙、そして明融本源氏物語のことなど」（『紙のレンズがひらく古典籍・絵画の世界』勉誠社）

【パネル1】打紙加工の施された末摘花巻の画像（雁皮主体・打紙加工の紙）

【パネル2】裏映りの激しい葵巻の画像（楮。紙量が少なく、かつ打紙加工も施されていない）

#7（耕雲本源氏物語）

山岸文庫蔵（841）。列帖装。五四帖（親長本27帖、補写本27帖）。親長本は（延徳、文明年間）写（親長本）。親長本は甘露寺親長筆。縦約22・1横約14・4糎。字高19・8糎程。香色無地後補紙表紙、中央に卵色地金泥金砂子草花様紙題簽貼付（全帖共通）。外題は巻名のみ墨書、題字は全帖一筆。扉題には巻名と並びを注記し、親長本のみ更に巻序が加わる。料紙は雁皮主体楮混じり。漉き返しが多い。一面行数8行、和歌は改行2〜3字下げ、成り行きで2行書

き、後続の地の文がそのまま続く形式。親長本にのみ各冊に耕雲の跋歌あり。また寛正・延徳・文明年間の本奥書ないし書写奥書がある（詳細後述）。識語「：右二十七帖甘露寺按察使親長卿手／筆也 雖為不備依有由緒從奥州／持來永為貴寺什物所令寄呈也／一覽之時者宜預廻向者也 承応 年 月 日 浅川彦左衛門尉昌純／善通寺御房」（夢浮橋）。印記「善通寺」（複郭墨文長方印、親長本と補写本4冊に捺す）。二重木箱入り。外箱は新装木箱。内箱側面の蓋に紙片剥離痕、右肩に「十六番」と墨書した紙票貼付。

▼耕雲本とは、花山院長親（号耕雲）が足利義持將軍の命により、憶説を粗陳し、各巻末にその要枢を詠じた跋歌を付して献上したとされる源氏物語の写本のことである。『明星抄』では「河内本にも非らず青表紙本にも非ず一様各別の本也」と紹介されていたが、池田亀鑑により、河内本を主とした混態本であるとされて今日に至っている。

本学所蔵の該書は、承応年間（1652～55）に浅川氏出身の昌純なる人物が奥州から持ち帰り、善通寺に寄贈した親長本27帖が基となっている。おそらくはその後同寺にて補写本が加えられ、一括改装されて現在に至ったものだろう。補写本の料紙は、親長本が漉き返し紙を利用しているのに対して、生漉きのもが多いようである。

この親長本27帖は、寛正三～五年（1462～64）・文明一～一七（1479～85）・延徳三年（1491）の本奥書や書写奥書を有し、その組み合わせによって次のように分類可能である。

①寛正年間の本奥書に文明年間の書写奥書を有する

……少女・胡蝶・柏木・横笛・御法・匂兵部卿宮・竹河

②文明年間の書写奥書を有する

……朝顔・常夏・野分・行幸・藤袴・真木柱・若菜上・橋姫・椎本・総角・早蕨・宿木・東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋

③寛正年間の本奥書に延徳3年の書写奥書を有する ……蓬生・薄雲

④延徳三年の書写奥書を有する ……濤標

これら該書の親長本について、近年仮名字母の出現傾向を調査した齊藤哲也氏によれば、甘露寺親長筆本の蓋然性が高いという。また最も完備した耕雲本のひとつとして知られている高松宮家本の本文とも非常に親しく、書写年代を考えれば、むしろ高松宮家本の親本である可能性が高いとの報告を出された。（上野）

＊参考文献

池田亀鑑 [1956] 「耕雲本の成立とその特質」（『源氏物語大成 研究資料篇』中央公論社）
上野英子 [1996] 「山岸文庫蔵『耕雲本源氏物語』解題」（『文芸資料研究所年報』15号）
齊藤哲也 [2024] 「実践女子大学山岸文庫蔵耕雲本『源氏物語』の用字―仮名字母と表記の比較を通して―」（『文芸資料研究所年報』43号）

第二章 『源氏物語』を注釈した書物たち

#8 光源氏物語系図

常磐松文庫蔵（913.36／42A）。折本。1帖。天文一三年（1544）写。伝三条西実澄筆。縦約17・2×横約17・4 釐。茶色地花鳥文様緞子表紙。外題「源氏物語系図」。内題「光源氏物語系図」。料紙は裏打ち済み雁皮。全四六丁。一面行数10行。奥書は以下の通り。

・「本云／此物語系図去長享二年／春之比肖柏等相談之訪宗祇／法師指南粗所清書之本也被／引余習以件愚本染禿筆／不可出窓外者也／永正第九鴈月廿七日／老槐散木御判」

・「卷々年紀為備忽忘大概注付之／永正十二 八」

・「此一冊依羽州羈客／碩与懇命於燈下卒／馳秋毫深可禁外見／而已／天文甲辰曆中秋戌午／垂槐（花押）」

二重箱。新装詔外箱。内箱の上蓋に「源氏物語系図 三条西三光院実澄公真跡」と墨書。上蓋と箱の側面に紙票（「子第一七八号」）貼付。享保十二年（1727）第七代目古筆家了延による証書一通と、二代目古筆家了栄および門人系による極札が各一枚、計3枚ある。

①証書一通、「実澄公源氏物語系図／証文」（包紙上書き）。

「源氏物語系図 一冊／三条西三光院実澄公／真跡無疑者也／享保十二年／仲秋下旬／古筆了延（琴山印）」（表）。「源氏物語系図（折本一冊御判アリ／天文甲辰中秋）（了延印）（裏）②極札「三条西殿実澄公御筆（源氏物語系図／折本一冊）（琴山印）」（表）。「光源氏物語系図（奥州判有／天文甲辰中秋）一冊（寅／四）（栄印）」（裏）。

③極札「三光院殿実澄公（源氏系図）（守村印）」（表。裏は白紙）

▼実隆が作成した源氏物語系図は、長享二年（1488）本・明応八年（1499）本・文亀四年（1504）本・永正九年（1512）本の四種が現存しており、これらの位相差について伊井春樹氏は「古系図から出発して、長享二年本では伝文を、明応八年では人物配列構造を確立し、文亀四年本では両者を統合するとともに、永正九年本ではさらに左大臣に關しての改訂を加えた」と指摘している。

該書は永正系図の実隆奥書と加注識語を転写し、「垂槐」（極めによれば、三条西実澄）の花押入り書写奥書を記していることから、天文一三年（1544）に、当時三四才だった実澄（権大納言。同年に諱を実世から実澄に改名）が「羽州覇客碩与」（出羽の有力武家出身で出家し連歌を嗜んだ人物か、詳細不明）なる人物の懇命により、祖父実隆最後の源氏系図となった永正系図を書写した資料ということになる。

花押の字形は、東京史料編纂所花押データベース掲載の花押例とは若干違っているようだが、筆跡は、『高案帖』所収伝三条西実世筆和歌色紙・早稲田大学図書館蔵伝三条西実枝筆源氏物語などと似ている。

永正系図の伝本は複数あるが、尊経閣文庫本・宮内庁書陵部本・国立国会図書館本・九州大学細川文庫本等と比較するに、該書には若干の誤写と思しき独自異文があるものの、意図的な改変を思わせるものはなく、まずは丁寧に書写された資料のようである。（上野）

＊参考文献

伊井春樹 [1980] 「実隆の『源氏物語系図』作成」（『源氏物語注釈史の研究 室町前期』桜楓社）

上野英子 [2005] 「常磐松文庫蔵『伝三条西実澄筆源氏物語系図』翻刻・解説」（文芸資料研究所『年報』24号）

#9 〔源氏小鏡〕

文芸資料研究所所蔵（306）。列帖装。一帖（存上巻）。永正二年（1505）写（奥書による）。書写者は「宗遍」（奥書による）。縦約20・8×横約16・0㎝。字高19・0㎝。共紙表紙。外題は左肩に「源氏註」と墨書。内題なし。料紙は漉き返し紙を用いた雁皮紙、米粉入り。但し

髷立ちが酷く、汚れも目立つ。一面行数10行書き、和歌は改行1字下げ2行独立書き（2行目は2字下げ）。奥書なし。木箱と帙入り。木箱上蓋には「源氏註 吉冊」と墨書。帙は緑地草花緞子貼りの誂え帙だが、題簽は無記入のままである。

▼該書に序文はなく、上巻目録から始まり、桐壺から少女巻までの本文が記されている。また本行には更に朱筆による合点・句点・傍注などが加えられた。

伊井春樹氏の分類に拠れば、概書の本文は第二系統第一類（古本系）のようである。そして同氏がこの系統の諸伝本のなかでも「古形を保ち信頼するに足る善本」とされたのが京都大学附属図書館蔵伝持明院基春筆本（伝称筆者基春の没年は1535年、その頃の書写かという）であったのだが、この基春本と比較すると、該書は、①漢字表記が多くなっている、②寄合箇所も他の文章と同じような書きぶりをしているため、寄合であることがやや曖昧で、朱筆の合点がそれを補っていること、③朱筆による傍注の書き入れに若干の異同がある、などの特色が見られるようである。

該書は、本行と同筆とみられる奥書の記述（「永正式年弥生日／宗遍」）から、1505年に宗遍なる人物によって書写されたと判断できるのだが、該当する人物については未詳。

本文料紙は雁皮の漉き返し紙を用いたものだが、填料に米粉を入れていたようで1000倍画像に偏光十字の影が多く確認できた。

（上野）

*参考文献

伊井春樹 [1930] 「『源氏小鏡』の成立とその影響」（『源氏物語注釈史の研究』桜楓社）

岩坪健 [2005] 「翻刻・解題」（『『源氏物語』諸本集成』和泉書院）

#10 源氏物語聞書（覚勝院抄）

文芸資料研究所所蔵（15）。三条西家旧蔵。袋綴。25冊。（室町時代末期か）。書写者は未詳。縦約27・4×横約20・4糎。字高約22・0糎。縹色無地紙表紙。各表紙中央に香色無地紙題簽を貼付、収載巻名と並びの巻序を墨書。左肩には「第壹（二十五）巻」と冊序を朱書。外題なし（巻序と巻名のみ）。内題「源氏物語聞書（或説并料簡加之）」。料紙は雁皮主体楮混じり、全冊裏打ち補修済み。一面行数は基本は9行。奥書は夢浮橋巻奥に、定家自筆本「奥入」の奥書を転写。印記「三条西」「宮田蔵書」「衣笠文庫」「月明荘」。誂え帙（縹色地菊・源氏車・松葉文様緞子貼り）。帙題簽を貼るも無表記。

▼三条西家源氏学の注釈書。料簡部分に「時代寛弘初造出之 康和二流布（寛弘ヨリ文明十年まで四百八十余年也 然者元龜貳年マテ八百七十四才歟）」とあることから、元龜二年（1571）の成立とされている。物語全文を併せ持った注釈であり、『万水一露』や『岷江入楚』の先蹤である。

形式は、冒頭に料簡を置き、以下本論部分は物語本文を適当な章段で区切って全文書写し、次に章段毎に「聞書注」として注釈をするのが基本形。それに付箋・行間注・頭注などが多数加わっている。

料簡は、内題の下に「此聞書此紙一丁詞称名院仍覚被遂一覽／逍遙院作云々弄花ノ序也逍ト肖相読也」とあるように、『弄花抄』料簡に依拠したもの。

物語本文は、前半が「能州典厩本」を写した覚勝院自身の本、後半が称名院からのお墨付きを得たという久我殿本を底本とし、これを「三条ヨリ冷ノ本」（三条家より冷泉本を以て、の意味か）で校合したという（藤袴卷付箋）。

聞書注には、『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』からの引用の他、「称名院講釈の時の説也」といった文言も散見する。称名院（公条）が物故したのは八年前。どうやら「聞書注」の基本となったのは、称名院最晩年の講釈聞書だったようである。

一方、付箋・頭注・行間注には「三垂説」「三説」「三大」といった出典名が目立ち、そのなかに「三大実澄ノ説也云々」（桐壺）の文言もある。これらは公条息だった権大納言実澄のもので、「帚木卷七度二三垂」（帚木付箋）等とあることから、追加注として実澄講釈の結果も加えていったと見られる。実澄は元龜三年（1572）に権大納言を辞任、天正三年（1574）に還任したものの、以後は実枝と諱を替えているため、これらの実澄講釈は元龜三年以前のものと判断できよう。以上が覚勝院抄全般に共通するものである。

一方、穂久邇文庫本など初期稿本系とされてきた諸本には、同系統独自の書き入れ注として加わった青墨等による「三大」注がある。こちらには実枝の法号「三光院説」の文言が見られるため、実枝が没した天正七年（1579）以降に加えられたものである。

該書は初期稿本系ではない。流布本系の複雑な書き入れも含めて、丁寧に転写された清書本である。だが同時に、該書独自の追記として色墨（黄・緑・青）や墨筆を用いて、これまた丁寧に訂正加筆した部分があるため、後期増補本類に属する。この該書独自の追記部分には「岷江」「孟津」といった典拠名が見られるため、慶長三年（1598）以降になされたものだろう。

かかる該書には二五冊の各冊冒頭に三条西家の蔵書印が捺されているが、同家で作成されたものなのか詳細は不明。本文料紙は楮斐漉き混ぜで、その大半が生漉きの紙とみられる。（上野）

＊参考文献

- 野村精一・上野英子 [1991] 『源氏物語聞書 覚勝院抄 別冊』汲古書院
上野英子 [2012] 「『源氏物語聞書覚勝院抄』雑攷―周辺人物・書本・成立経緯をめぐって」（豊島秀範編 文科省科学研究費一般研究（C）成果報告書『源氏物語のデータ化と新提言Ⅱ』所収）
同 [2014] 「『覚勝院抄』にみる三条西実澄の源氏学―「三垂説」の分析を中心に」（日向一雅編『源氏物語注釈史の世界』青簡舎）
同 [2014] 「『源氏物語聞書〈覚勝院抄〉』における〈三説〉をめぐる考察」（実践女子大学文学芸資料研究所『年報』33）

#11 【九条家本源氏物語聞書】

常磐松文庫所蔵（913.36/41A）。九条家旧蔵。袋綴。5冊。（元和以降の書写か）。縦約28・0×横約21・2㍿。字高21・4㍿。表表紙は無地縹色、裏表紙は無地香色の紙表紙。外題なし（帙題簽参照）。内題なし。雁皮主体楮混じり。一面行数11行。全文同筆。印記「九条」（各冊冒頭）、「月明莊」（各冊末尾）。綴子貼帙入り（帙題簽「九条家本／源氏物語聞書〔中院通勝講／慶長元和頃写〕五冊」）。

▼天下の孤本である。奥書・識語の類いこそ無いが、成立経緯を示唆するとみられる年次記載が「慶長九閏八月二日於水無瀬殿 素然」（末摘花卷）「慶長十三年二月廿三 於水無瀬殿 中院殿也足軒講釈此卷より読はしめ給ふ」（初音卷）「慶長十三年四月十九日に御講釈終」（夢

浮橋)等と散見できることから、筆録者は、中院通勝が慶長三年に『岷江入楚』を完成した後、彼の講筵に列座していた人物である。

また聞書のなかに、後陽成天皇を「院様」と呼んでいる箇所がある。御讓位は慶長一六年(1611)、通勝はそれ以前に没していることから、「院様」の呼称は筆録者によるものであり、通勝講釈の聞書が元和以降にまとめられたことが窺われる。

更に多くの巻の巻末に、「追」と題した追加注がある。そこには『林逸抄』からの引用が目立ち、他に『一葉抄』『休閒抄』『尋流抄』からの引用もある。筆録者は三条西家源氏学だけに収まらない、こつした地下の連歌師らの説にも関心を寄せていたようである。紹巴に対して待遇表現を用いておらず、それは身内だったからなのか、筆録者の方が上位だったからなのか。ともあれ、追加注部分は筆跡・料紙ともに本行部分と変わらないため、筆録者は当初からこの部分も加えて、清書したようである。

紙質は雁皮主体だが、漉ぎ返しで、紙量不足の為か紙質が薄く、かつ幾つかの繊維束が叩解し切れず細い筋になって残っている。打紙加工は施されていないものの、米粉の存在は確認できた。

該書には5冊に分冊された各冒頭に「九条」の印が捺されている。かかる聞書が撰家(九条家)で作成されたのか、それとも献本されたもののものかは不明。(上野)

＊参考文献

- 徳岡涼 [2011] 「常磐松文庫蔵『九条家本源氏物語聞書』解題」(文芸資料研究所『年報』20)
野村誠一・渡辺道子・徳岡涼 [2003~8] 「常磐松文庫蔵『九条家本源氏物語聞書』解題拾遺(一)」(五)」「(文芸資料研究所『年報』第22~27)

第三章 『源氏物語』の和歌

#12 (源氏物語カルタ)

文芸資料研究所蔵(642)。全一〇八枚。(近世中期写か)。縦約8・4×横約5・5糎。三桎主体楮混じりの漉ぎ返しに米粉を入れた料紙。これに銀箔で裏打ちしたもの。散らし書き。漆塗り木箱入り。

▼『源氏物語』の巻名和歌等54首をそれぞれ上下二枚の札に分けて記したものの。上の句を記した札には巻名と極彩色の絵も記され、下の句を記した札には金泥墨流し模様が付されている。同一の絵師によって絵が記され、その後、同一の写し手によって和歌が加えられたのだろう。

該書のカルタに採用された和歌五四首中、藤裏葉と若菜下の二首は物語本文中の引歌に拠り、残る五二首は巻名由来歌に拠っている。とはいえ、巻名の由来歌の特定には揺れがあり、由来歌が固定化されていたのは『孟津抄』『絵入源氏物語』を経て『湖月抄』に至ってからのようである。だが本カルタで採用された由来歌は、そうした古注釈系に拠ったとは思われない。むしろ『百人一首』の upper や巻末付録、あるいは各種女子用往来物などに「源氏香図引歌」「源氏五十四帖引歌香図」などと称して掲載された由来歌との一致率の方が高い。本文は青表紙系、就中三条西家本に近いようではあるが、「文字程度の誤写や独自異文も目立つ。一方カルタに描かれた絵についてであるが、伊井春樹氏によれば、源氏物語の絵画化は場面の象徴化が進み、ついには記号化まで行き着いたとされている。その観点で云えば、本カルタの絵は場面絵を描いた巻のなか

に、一部その巻を象徴するような事物を描いた巻も加わっている。場面絵から事物絵への過渡期に作成されたカルタのようである。

＊参考文献

伊井春樹 [2008] 「源氏物語絵詞―場面の象徴化」 (學燈社『国文学特集絵で読む源氏物語』1月号)

上野英子 [2008] 「文芸資料研究所蔵『源氏カルタ』について―源氏物語におけるへ一帖一首一図」資料との関係を中心に」 (文芸資料研究所『年報』27)

清水婦久子 [2014] 「源氏物語の巻名の由来 (『源氏物語』の巻名と和歌) 和泉書院」

#13 (源氏物語和歌集切) 伝二条為氏筆 (横小本切) 一葉

文芸資料研究所蔵。まくり一葉。(鎌倉時代初期～中期頃) 写。伝二条為氏筆 (極札による。後述)。縦9・9×横15・1糎。紙の継目はないので横長の横小本切。字高は最大8・3糎程。下絵のある楮紙打紙 (後述)。一面15行。和歌一首3行書 (改行と句切れは対応しない)。初代畠山牛庵極札「へなとてかく」二条家為氏卿 (仙室)」。裏面は確認できず。

▼『平成新修古筆資料集 第五集』に「一四 後京極良経 小巻物切 (源氏集)」として所収。真木柱巻の和歌五首を物語に登場する順番で書写する。作者名や詞書はない。『古筆学大成 (二三巻)』が「後京極良経 源氏物語和歌切 (一)」と分類する2葉のツレと推定される。他に『古筆切集 浄照坊蔵』に一葉、冷泉家時雨亭叢書84『古筆切・拾遺』に一葉、ツレと目される古筆切がある。

横法量の最長は時雨亭文庫蔵切の17・8糎。展示品には巻皺らしきものがあり、ゆえにもとは卷子本とみる見解がある。が、時雨亭文庫蔵断簡には書影をみるかぎり巻皺がない。横長の冊子本だった可能性も残る。明石、玉鬘、藤袴、真木柱、梅枝の各巻が確認されているので、全ての巻の和歌がもとは書き出されていたのだろう。

『大成』解説によると、図371は二代牛庵によって冷泉為相と鑑定され、図372は了任編『布留鏡』に後京極良経と鑑定されているらしい。浄照坊蔵切は (鑑定者はわからないが) 藤原有家とされている。時雨亭文庫蔵切については不明。そして展示品は初代牛庵が二条為氏と極める。いまのところ鑑定者によって伝称筆者はすべて異なっている (稀なケースではないだろうか)。

下絵の素材について様々な見解が出されている。「丁子の染料で、水辺の葦叢、文字石様などを書き添えている」、「薄墨」、「緑青であろうか」、「銀泥」、と同じ見解がない。展示品の下絵は、X線金属成分分析器 (HTACHI社・X-MET8000 Optimum) を用いて調査したところ、銀を示すAgは全く検出されなかったもので、銀泥ではなからう (本調査には日比谷孟俊氏へ本学文芸資料研究所客員研究員の助力を得た)。↓**【展示パネル参照】** 展示品の下絵は薄墨と推定されるが (なお調査を継続中)、そうすると銀泥の下絵であるという時雨亭文庫蔵断簡は、同筆で書写された源氏物語和歌の抜き書きながら、本展示品のツレではないということになるか。それとも、巻や丁によって下絵の素材を変えていたか。筆跡と書写内容からツレと目される四葉の下絵についても成分分析が必要と思われる。 (舟見)

＊参考文献

『古筆切集 浄照坊蔵』 (和泉書院、1988)

『冷泉家時雨亭叢書84 古筆切 拾遺』 (朝日新聞社、2009)

田中登編『平成新修古筆資料集 第五集』 (思文閣出版、2010)

第四章 紫式部の和歌

#14 紫式部集

常盤松文庫蔵 (67354)。著作ID: 510827。列帖装。一帖。1556年写 (※書写奥書に「天文二十五年」とあるが天文は二十四年に改元)。伝称筆者「三条公頼」(極札による、なお後述)。縦17・0×横15・3糎。字高、和歌13・5糎内外(一首二行書きで二行目は半字下げ)、詞書は和歌より1・2糎ほど下から書く。改装茶地一重牡丹唐草金欄表紙。見返しは金箔押。外題左肩後補題簽に墨書「むらさき式部集」(本文別筆)。内題なし。料紙は横井[2023]によると斐楮混漉紙。一面十行書、和歌一首二行書(二行目は半字下げ)。(本奥書)「〈本云〉以京極黄門〈定家卿〉筆跡本不違／一字至行賦字賦雙紙勢分／如本令書写之于時延徳二年／十一月十日記之／癩老比丘判」、(書写奥書)「天文廿五年夾鐘上澣書写之」。近代製の桐函あり。極札包紙ウハ書「轉法輪三条殿公頼公／紫式部集極外題」、極札「轉法輪三条殿公頼公 紫式部集(牛庵)」(三代畠山牛庵極)。他に三条公頼の略歴を記した近代製加飾紙あり。

▼『新編私家集大成』ほか、『紫式部集』を翻刻する際に底本として採用されることの多い著名な一帖。影印として『紫式部集大成・実践女子大学本・瑞光寺本・陽明文庫本』(笠間書院、2008)がある。本奥書によると、親本は、延徳二年(1490)に、「癩老比丘」(未詳)が、定家筆本を文字・行数・改訂などまで違えず写したものであった。それを天文二五年に何某が転写したのが本書であるが、天文は二四年に改元、伝称筆者である三条公頼は天文二〇年にすでに没している。そのためこの書写奥書自体を不審とする向きもある。

本書の筆跡は、東北大学附属図書館蔵『詠十五首和歌』(丙A・1-11・82、46)の書写奥書「永祿四年仲秋上澣 長珊(花押)」や、東北大学附属図書館蔵『新古今和歌集抄出聞書』(丙A・1-11・82、37)、名古屋大学附属図書館神宮皇学館文庫蔵『伊勢物語』一帖(皇.W913.321、来田家旧蔵本)と同筆と目される。よって本書は、伴鴎斎・猪苗代長珊(生没年未詳・室町時代後期)によって書写された一帖と推定する(舟見[2023]を参照されたい)。長珊は『源氏物語』の注釈書『長珊聞書』の製作にも関わった人物として知られる。本書との関連や陽明文庫蔵『長珊聞書』の筆跡(本書とは異筆)などについては今後の検討課題。また本書の親本は定家本を忠実に写したというが、ここにいる定家本なるものの素性がそもそも不明であり、数葉現存する伝定家筆紫式部集切を定家筆とみてよいかも検討の余地がある。長珊は『実隆公記』にたびたび登場し、実隆から典籍の書写を依頼される人物であった。本展示品と実隆との関係(『実隆公記』に記されている「紫式部集」との関係)や、陽明文庫本と違いがある理由など、書誌学文献学的見地から考究すべき点が多く残されている。なお濁点を示す二つの圈点を施した文字がある。本文同筆か。これも書写年代を同定する鍵であったが拙稿では見落としていた。(舟見)

*参考文献

三谷邦明 [1971] 『実践女子大学図書館蔵 むらさき式部集』『源氏物語とその周辺 古代文学論叢2輯』武蔵野書院

野村精一 [2001] 「作家・作品・作者 ―むらさき式部のばあい―」『源氏物語研究集成』第十巻、風間書房
横井孝 [2007] 「実践女子大学本『紫式部集』奥書考」『国語と国文学』84-1
同 [2023] 「紫式部集の紙」『紫式部集の世界』勉誠出版
舟見一哉 [2023] 「実践女子大学蔵『紫式部集』は長冊筆か」『紫式部集の世界』勉誠出版

第五章 和歌の規範 ―勅撰和歌集―

#15 古今和歌集 伝一条冬良筆

文芸資料研究所蔵 (226)。列帖装。二帖。〔室町時代後期〕写。伝一条冬良筆（折紙による）。縦22・0×横15・5糎。字高、仮名序22・0糎、和歌19・8糎内外（詞書は和歌より1・5糎ほど下に、作者名は和歌より10・0糎ほど下に書く）。原装二重蔓牡丹唐草金欄表紙。見返しは金銀泥雲霞草木描。外題は左肩貼題簽（加飾）に墨書「古今和歌集 上」「古今和歌集 下」。内題は「古今和歌集卷第一（二十）」。「楮紙打紙（垂直方向に簀目が強く見える）。仮名序は九行書、真名名序は八行書、巻第一以降は一〇行書、和歌一首一行書。本奥書として定家の貞応二年七月廿二日本のもと「同廿八日令読合訖書入落字畢／傳于嫡孫可為将来之証本」を有する。書写奥書なし。二重箱。桐製外箱ウハ書「古今和歌集 全部 二冊」「一條関白冬良公筆」「近衛相国近衛植家公外題」「折紙 古筆了伴」、右上部に旧蔵者のラベルなどの痕あり。漆塗内箱金泥ウハ書「古今和詞集 全部」「一條関白冬良公真筆」「外題 近衛相国近衛植家公毫」。折紙包紙ウハ書「一条殿冬良公 古今和歌集 折紙」、折紙本文「古今和歌集 へ上下二冊」／外題 近衛関白植家公／ 一条関白冬良公芳翰／無疑者也／〈文政十二年〉初冬上旬 古筆了伴（琴山）」。

▼一条冬良（1464～1514）を伝称筆者とする『古今集』の完本二帖。書写奥書はない。下帖末尾遊紙ウの左下に文字を消した痕がある。所持者名が書いてあったか。本書の筆跡は、冬良の書写奥書を有する国立国会図書館蔵『連珠合璧集』[WAT6-23]などと比較すると、似通う部分はあるが冬良真筆と断ずるには及ばない。貞応二年定家本の本奥書があり、仮名序に「あさかやま」歌の書き入れが無い点や、巻第一の排列が18番↓19番と並んでいる点など、貞応二年定家本の特徴を有する。本文同筆による勘物も貞応二年定家本のものである。ただし声点はない。仮名序・本文・墨滅歌・真名序の順番で書写する。なお、他本の本文を注記する箇所が一部にある（秋下・278番歌第五句「花かとぞ見る」に対して、本文同筆で「ところこみれ」など）。（舟見）

＊参考文献

武井和人 [2007] 「室町後期自筆本攷（一） 国会図書館蔵兼良冬良筆『連珠合璧集』」、『研究と資料』58

#16 八代集

山岸文庫蔵 (A81)。すべて列帖装。各一帖、計八帖。（江戸時代中期頃）写。全帖一筆。『古今集』は縦17・1×横11・6糎、他もこれに準じる。『古今集』の字高は、和歌一首14・5糎ほど、他もこれに準じる。原装海松色金泥雲霞草木絵表紙。見返しは金切箔散。外題は中央原題簽（代赭色）に墨書「古今和歌集」「後撰和歌集」「拾遺和歌集」「後拾遺和歌抄」「金葉和

歌集」「詞花和歌集」「千載和歌集」「新古今和歌集」。すべて本文同筆。内題も同。すべて鳥の子紙。『古今集』は一面行数10行、和歌一首一行書、他もこれに準じる。奥書・識語については後述。印記「英 王堂藏書」（朱陽長方印）を押した紙片を前遊紙第一丁に貼付する。「山岸文庫」（朱陽長方双辺）を表紙等に押す。

▼『古今集』末尾に添付された山岸徳平筆の一紙に「八代集 八冊 上田萬年先生藏本（…略…）昭和十三年八月十一日朝記之／岸廼舎」とある。山岸は貴重図書影本刊行会『古今集』に「伊達家本古今和歌集解説」を書いているが、それは昭和十三年八月であった。山岸は定家本古今集の諸本について書写年順に詳述しているが、本書には言及していないので、解説の刊行直後にこの本を入手したか。山岸の記す「上田萬年先生藏本」という記述と、「英 王堂藏書」の印記から、本書はバジル・ホール・チェンバレン旧蔵本と推定される（ただし印を押した紙片を貼り付けている点は疑問）。なお久曾神「[1961]」が「49頁で言及する「上田萬年旧蔵八代集本」は当該本を指すと目される。

『古今集』……山岸が注目している通り、伝本稀な定家嘉禎三年正月本の本奥書と、定家貞応元年九月本の本奥書をもつ。伝本研究上きわめて重要な写本であるが、これまで取り上げられたことはない。要精査。

『後撰集』……墨筆による本奥書は、定家天福二年本、融覚の附属識語に次いで、一部の伝本がもつ秀奥書「此集依 勅命以相伝秘本（定家卿／筆）具令校合訖」と、定家無年号本奥書「或先達云此集作者名等頗以狼藉……」が続く。同様の奥書をもつ伝本は二点ほどと少ない。また朱筆にて校合本の奥書も転記されており、それは「元亨四年十月十四日以家説授浄弁律師了 前垂将（在判）」という為世本のもの。こちらも伝存稀れである。こちらも要精査。

『拾遺集』……本奥書は、定家天福元年本（二条家本）、徳治三年の奥書（為相力）があり、丁を変えて「此集長徳比大納言公任卿撰之云々……」とはじまる識語を転記する。さらに、校合本とされた文龜四年三月五日素珊筆本の書写奥書が朱筆で転記されている。この素珊筆本に基づく朱筆の書き入れ注記のなかには、内閣文庫蔵本などにみえる六条藤家本に関わる「季本」注記（1120番歌「季本 そわきく しかみ」など）や、詳細な動物がある（舟見[2015] 参照）。

『後拾遺集』……「御朱書之校本云」として文応二年の公朝奥書（書陵部蔵二十一代集[510・13]などと同じ）と寛正二年の奥書をもつ。反御子左派のなかで流布していた系統か（舟見[2014]）。『金葉集』……承安五年に俊頼自筆本で校合したという本奥書と、頓阿の本奥書をもつ。同様の伝本は他にも多く存する。なお動物はない。

『詞花集』『千載集』……奥書類はない。未調査。

『新古今集』……成立に関わる『八雲御抄』と「京極中納言入道抄」の一節を引いた後、「壬辰歳小春日 桃叟判」とする兼良本の本奥書を有する。同じ奥書を有する伝本があるか調査できないのでご教示を願う。

以上のように、中本という小ぶりのサイズながら、伝本研究上きわめて重要な奥書や書き入れを有するものが多く、また勅撰集研究史を辿る上でも頗る興味深い資料である。全体の公開と考察は別稿にて行いたい。（舟見）

＊参考文献

- 井上宗雄 [1965] 「冷泉家関係者の記した奥書を持つ歌書類について」、『立教大学研究報告』18
片桐洋一 [1970] 『拾遺和歌集の研究』大学堂書店
片桐洋一 [1994] 「解題」、『冷泉家時雨亭叢書 古今和歌集』朝日新聞社
久曾神昇 [1961] 『古今和歌集成立論 研究編』風間書房

小松茂美 [1961] 『後撰和歌集 校本と研究』誠信書房
 西下経一 [1954] 『古今集の傳本の研究』明治書院
 松田武夫 [1944] 『勅撰和歌集の研究 増補版』日本電報通信社
 舟見 [2013] 「冷泉家・二条家における証本とその利用法―定家筆『古今和歌集』を中心に―」『富裕と貧困（生活と文化の歴史学）』3、竹林舎
 舟見 [2014] 「清輔本・定家本『後拾遺和歌集』の復元試論」『和歌文学研究』108
 舟見 [2015] 「清輔本『拾遺和歌集』の残痕―定家本の生成に及ぶ」『和歌文学研究』110
 舟見 [2016] 「新出・再出現の『古今集』三点―林原美術館蔵保元二年清輔本・嘉禎三年八月定家本」『武蔵野文学』64
 舟見 [2021] 「清輔本『金葉和歌集』の再建に向けて」『実践女子大学文芸資料研究所年報』40

#17・18 伝寂蓮筆／伝清輔筆 後撰集切 二葉

ツレの二葉をまとめて解説する。17は文芸資料研究所蔵、18は個人蔵。17の書誌は以下の通り。軸装一幅。（平安時代末期～鎌倉時代初期）写。伝寂蓮筆（極札による）。縦22・6×横14・8㎝。字高、和歌20・0㎝、詞書は和歌より2・0～2・5㎝下に書き、作者名は和歌より10・5㎝ほど下に書く。料紙は楮紙打紙。全面に雲母を薄く引く。一面行数7行、和歌一首2行書。極札包紙「極札」。鑑定者未詳極札「寂蓮法師 あきくらし」（裏面「公嚴」と墨書）。18は、法量や紙質など17と同じい。古筆了仲が「藤原清輔」と鑑定。

▼17と18は、伝称筆者は異なるがツレである。『古筆学大成』が「伝寂蓮筆 後撰集切（一）」とする四葉のツレ。石川県立美術館蔵手鑑にも一葉ツレがあり、そちらは古筆了佐の「清輔朝臣」という極札をもつ。「伝寂蓮筆 後撰集切（一）」の二図は、『後撰和歌集 校本と研究』によると根津美術館蔵手鑑『染雲叢』所収の一葉で、初代古筆勘兵衛が「寂蓮法師」と鑑定した極札があるとの由。また図102はまくりで裏面に「西行」とあるらしい。勘物をもつゆえに、推定書写年代を勘案して「清輔」を伝称筆者とする場合もあったか。

書写年代を『古筆学大成』では平安時代末期とし、『古筆手鑑大成』は鎌倉時代とする。展示品にみられるような寂蓮様の仮名は、平安時代最末期から鎌倉時代初期に遺品を見出せるため、展示品とそのツレはその頃の書写と判断した。

勘物は、顕昭『袖中抄』や、『五代勅撰』所収の『後撰集注』逸文と類するところがあるので、散逸した清輔本後撰集に関わる資料として要精査。
 （舟見）

*参考文献

小松茂美 [1961] 『後撰和歌集 校本と研究』誠信書房
 杉谷寿郎 [1971] 『後撰和歌集諸本の研究』笠間書院
 別府節子 [2005] 「平安の仮名、鎌倉の仮名」『平安の仮名 鎌倉の仮名』出光美術館
 舟見一哉 [2006] 「清輔本後撰集証本の性格―承安三年書写本再考―」『國語國文』75-10

#19 藤原定家筆 紹巴切（後撰和歌集）一葉

文芸資料研究所蔵（707）。軸装一幅。（鎌倉時代前期）写。藤原定家筆。縦22・1×横14・1㎝。字高、和歌本文は21・2㎝内外、詞書は和歌から2・5㎝ほど下に書く（詞書の最大字

高18・6糎）、作者は和歌から9・0糎ほど下に書く。料紙は楮紙打紙（後述）。一面行数10行、和歌一首1行書。外函ウハ書「定家卿紹巴切」、蓋裏書「後撰集卷十一 浪華法眼塊堂識」（田中塊堂）。極札「藤原定家卿ちはやふる」（裏白。鑑定者不明）

▼定家真筆の『後撰集』断簡として古来より著名な紹巴切。現在五〇葉ほどが確認されている。最近公開された『高木聖鶴コレクション図冊』にも新出の一葉があり、またメトロポリタン美術館蔵手鑑『藻鏡』にも一葉が見出せる。著名な名物切であるため、定家様で書写された後世のものも多い。定家筆紹巴切と認める際の基準となるのは、天正十九年の紹巴自筆添状を伴う慶應義塾大学センチュリー赤尾コレクションの一葉（AW-CEN-000250-0000）である。

展示品は『後撰和歌集』巻第十一・七八一詞書く七八三歌の部分。定家は幾度も『後撰集』を書写しているが、紹巴切がいつ書写されたのかははっきりしない。ただし、定家による本文校訂の推移、とくに作者名表記の変化から、嘉禄二年の『古今集』の書写と同時期かとする見解もある（片桐〔2000〕）。なお、展示品を定家自筆の天福二年本と比較すると、本文は一致するが丁の変わり目は異なる。また勘物も異なる。

高精細デジタルマイクロスコープを用いて紹巴切の料紙を観察すると、黒や灰色がかった繊維が混在しており、墨の塊りらしき黒い点も点在していることがわかる。おそらくこれらは、いちど書写に利用した紙を漉き返した際、脱墨しきれなかった繊維の残痕であるう。つまり、紹巴切は、平たく言えばリサイクル紙であったと推測される。定家筆紹巴切は紙面の傷みや破損が目立つが、それはこういった紙質とも関係があるか。↓【展示パネル】

＊参考文献

片桐洋一〔2000〕「『貞文』『文屋』から『定文』『文室』へ」『古今和歌集以後』笠間書院

第六章 勅撰和歌集をうつす寂恵

#20 寂恵および右筆 拾遺和歌集（巻第一〜十 零本）

◎重要文化財

山岸文庫蔵（5197）。列帖装。一帖。（鎌倉時代中〜後期）写。寂恵（および右筆）筆。縦23・4×横16・0糎（上部に化粧断の痕跡がある）。字高、寂恵筆部分は和歌18・0糎内外、詞書は和歌より1・8〜2・0糎下に書き、作者名は和歌より8・5〜8・9糎下に書く。右筆部分もほぼ同じ。ただし一文字の大きさが右筆部分のほうが若干大きい。改装紺地金切箔金泥雲霞唐草文表紙、見返しは金箔押。外題は左肩後補題簽（丹色地金銀泥加飾）に墨書「拾遺集」。内題「拾遺和歌集巻第一（〜十）」。「料紙は楮紙打紙。一面行数9行・和歌一首2行書。上帖末尾に「この集順教御房にこまかによみきかせまいらせ候ぬ 判」（※寂恵筆）とあり、次丁に書写奥書がある。「斯集雖有一部書写之志、老病／右筆不合期之間、上帖之内第一第／二第十等染愚筆、其外所用他／筆也、但於其説者傳受之分無／所残所奉授糟屋賢郎也／ 桑門寂恵（花押）」。「箱は近代製桐函（朱文丸印「山岸」あり）。古筆了栄極札「安倍寂恵法師 拾遺集（花山）」を前表紙見返しに添付。

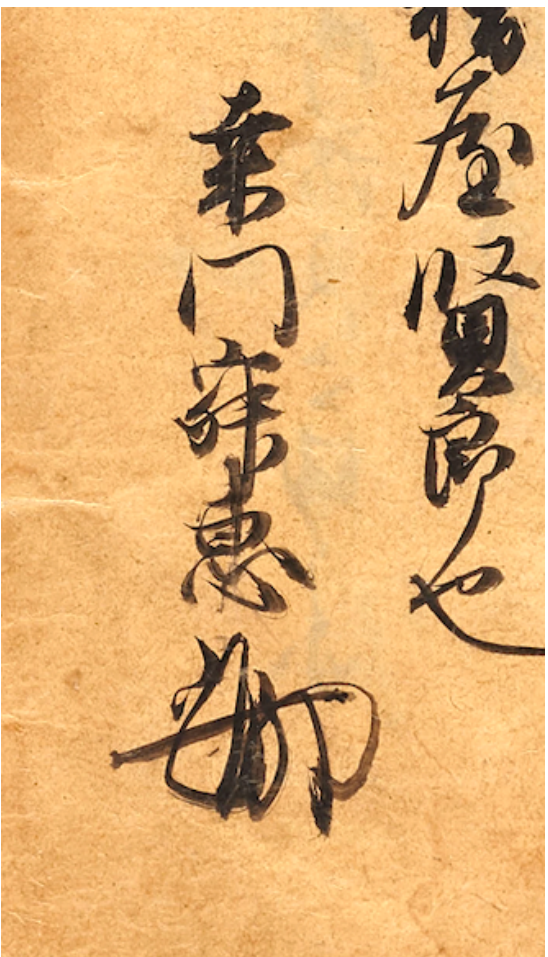
▼寂恵筆部分は巻一・二・一〇と奥書。その他は奥書にある通り右筆の書写。寂恵筆『古今集』の筆跡とは幾分異なる。本書の奥書に「老病」云々とあるので『古今集』よりも後の書写と推定

される。『古今集』にある寂恵の花押と異なる点があることなど、書誌的問題点や筆跡については舟見 [2016] を参照されたい。

近時、小川 [2024] によって、寂恵本『古今集』（上帖書陵部・下帖個人蔵）の奥にある、本文別筆の伝授奥書「古今一部順教御房にこまかによみきかせまいらせ候ぬ（花押）」が阿仏尼の筆跡かとみる説が出された。詳細は小川 [2021]、同 [2024] を熟読されたいが、確かにそう考えてよいと思われる。そうすると、本書『拾遺集』にある、寂恵によって転記されている伝授奥書「この集順教御房にこまかによみきかせまいらせ候ぬ 判」も、文章の書き方の類似から、阿仏尼による伝授奥書の転記である可能性が出てくる。阿仏尼は『拾遺集』についてどのような説を知っていたのだろうか。本書には、寂恵本『古今集』にあるような大量の書入れ注記はなく、「こまかによみきかせまいらせ候ぬ」の実情はわからない。今後の搜索対象は、本文は寂恵筆、かつ別筆で伝授奥書（花押あり）があり、さらに書き入れ注記もある、もうひとつの寂恵筆『拾遺集』である。この点、次の#21解説も参照。（舟見）

＊参考文献

- 山岸徳平 [1974] 「解題」、『復刻日本古典文学館 拾遺和歌集 寂恵本』日本古典文学刊行会
阿部秋生・前田裕子 [1982] 「寂恵本拾遺和歌集上一冊（調査報告二）」『実践女子大学文芸資料研究所年報』¹
井上宗雄 [1987] 『中世歌史の研究南北朝改訂新版』明治書院
小川剛生 [2021] 「謡曲「六浦」の源流・称名寺と冷泉為相・阿仏尼」『金沢文庫研究』347
小川剛生 [2024] 『「和歌所」の鎌倉時代』NHKブックス
片桐洋一 [1970] 『拾遺和歌集の研究』大学堂書店
川上新一郎 [1999] 『六条藤家歌学の研究』汲古書院
同 [2003] 「寂恵の古今集研究について」、『新道文庫論集』38
北野克 [1964] 「山岸徳平博士蔵寂恵本拾遺集上帖について」、『拾遺集北野本』別冊解説、端居書屋
久保田淳 [1958] 「順教房寂恵について」、『国語と国文学』35-11→『中世和歌史の研究』明治書院、1993
田淵旬美子 [2009] 「人物叢書阿仏尼」吉川弘文館
福田秀一 [1972] 『中世和歌史の研究』角川書店
舟見 [2016] 「寂恵の古典書写をめぐって―筆跡と本文―」『東京大学史料編纂所研究紀要』26



寂恵筆 書写奥書
署名と花押部分

#21 伝寂恵筆 拾遺集切 一葉

文芸資料研究所蔵。古筆切まくり一葉。（鎌倉時代中～後期）写。伝寂恵筆（極札による）。縦20・6、横7・0糎。字高は和歌18・8糎、詞書は歌頭から1・8糎下に書き、作者名は歌頭から7・2糎下に書く。料紙は楮紙打紙。一面行数4行存、和歌一首2行書。極札オモテ「安倍寂恵 けふ氏人の（幽硯）」（末田幽硯極札）、極札ウラ「「」人の 小切（甲戌壬五）（栄）（門弟）」、本紙裏書「法眼慶融」、裏打紙「寂恵 甲戌壬五」。

▼『拾遺集』巻十一・657（和歌下句）～658に相当する古筆切。慶融を伝称筆者とする裏書と寂恵を伝称筆者とする末田幽硯極札が併存するが、#20と同筆と判断する。ただし、#20が作者名を和歌から8・5～8・9糎下に書く書式であるのに対して、こちらは7・2糎下に書く。この1糎の違いを誤差の範囲とみるか、それとも有意な違いと判断するか。それによって、#21が#20の失われた下帖に相当するか、それとも寂恵筆『古今集』のように寂恵が書写した別の『拾遺集』の一部とみるか、変わってくる。一葉では判断できないので、ぜひ本書のツレらしきものや、寂恵を伝称筆者とする拾遺集切の存在についてご教示をお願いしたい。（舟見）

*参考文献

舟見「寂恵本拾遺集と古筆切」和歌文学会第68回大会・researchmap
舟見 [2023] 「字高の効用」『日本文学研究ジャーナル』26

#22～26 + 追加1点 寂恵筆石見切（古今集）

◆田中登先生は、「座談会 黒川文庫の過去・現在・未来」（『実践女子大学文芸資料研究所年報』30号、2011）において、#20寂恵筆『拾遺集』に触れつつ、次のように述べておられた。

私が注目していたのは、この寂恵という人が古筆切にしょっちゅう登場する人だということなんです。確認できるだけでも『古今集』『後撰集』『千載集』『続古今集』の古筆切を残し、すべてが同筆で、寂恵本『拾遺集』ともすべて同筆、すなわち寂恵の真筆だということなんです。古筆切は九割以上はいい加減な鑑定だといわれていますが、必ずしもそうではないということが証明されたわけです。ですから、今後も寂恵本拾遺集は古筆切とも併せて、寂恵の書写活動の一端としてとらえていくべきだろうと思います。最近は実践女子大学でも古筆切の収集に意欲的に力を注いでいらっしゃるようなので、ぜひ、寂恵本を集めて展示していただきたいものです。

田中先生から生前賜った御学恩に少しでも報いたく、ここに寂恵筆の古筆切を集め、寂恵本『拾遺集』とともに展観することにしました。

▼書誌事項は省略。寂恵筆と推定されている石見切は、書写内容が重複する断簡が数点確認されている。それは書入れ注記のあるものと無いものとに大別されるが、その区別は字高の違いとも対応している（舟見 [2023] 「字高の効用」『日本文学研究ジャーナル』26）。今回展示しているものはすべて、書き入れ注記のない寂恵筆切。寂恵は完本として残っている『古今集』いがいに何度も『古今集』を書写していた。それらが古筆切となり、ツレの区別ができなくなっていく、現在に至る。集成と分類は今後の課題である。（舟見）

*参考文献

川上新一郎 [1999] 『六条藤家歌学の研究』汲古書院

同 [2003] 「寂恵の古今集研究について」、『新道文庫論集』38
小林強 [2000] 「『古筆学大成』4巻及び5巻関係・『古筆学大成』未所収の主要伝称筆者関係の古今集切一覽稿」自讃歌注研究会会誌8
日比野浩信 [2009] 「十三代集の古筆切 志香須賀文庫所蔵断簡の紹介を兼ねて」、『愛知淑徳大学国語国文』32

#27 伝寂恵筆 後撰集切

個人蔵。まくり一葉。（鎌倉時代中～後期）写。寂恵筆（極札による）。縦23・3。横13・8。字高は和歌最長19・7、詞書は和歌より1・3。糎ほど下に書く。楮紙打紙。一面8行、和歌一首2行書。古筆了栄と川勝宗久の極札。

▼『古筆学大成』が「伝寂恵筆後撰和歌集切（一）」とするもののツレ。他に金刀比羅宮蔵手鑑『古今筆陣』などにツレがある。筆跡は寂恵筆『古今集』よりも#20寂恵筆『拾遺集』により近く、後期の寂恵筆と推定される。（舟見）

＊参考文献 舟見 [2016] 「寂恵の古典書写をめぐって」、『東京大学史料編纂所研究紀要』26

#28 伝寂恵筆 金葉集切

個人蔵。まくり一葉。（鎌倉時代中～後期）写。伝寂恵筆（極札による）。縦23・8。横15・4。字高は和歌最長21・0、詞書は和歌より2・5。糎ほど下に書く。作者名は和歌より10・3。下に書く。楮紙打紙。一面10行、和歌一首2行書。朝倉茂入の極札。

▼『古筆学大成』が「伝寂恵筆金葉和歌集切（二）」とするもののツレ（永青文庫蔵手鑑『墨叢』所収）。他にお茶の水女子大学附属図書館蔵まくりもツレ。筆跡は寂恵真筆とは認め難いが、#20寂恵筆『拾遺集』の右筆部分の筆跡に似通う。（舟見）

＊参考文献 舟見 [2016] 「寂恵の古典書写をめぐって」、『東京大学史料編纂所研究紀要』26

第七章 さまざまな和歌集 ―私家集、百人一首、歌合―

#29 斎宮女御集切 一幅

文芸資料研究所。軸装一幅。（江戸時代）写。伝藤原公任筆（箱書による）。縦22・3。横15・6。字高19・3。糎程。詞書は和歌より4・5。糎ほど下に書く。料紙は二重蔓唐草と草花二重丸文を雲母で刷り出した唐紙。一面行数5行。和歌一首2行書。外函側面貼紙「伝公任筆／唐紙歌集切／贈答二首」

▼この二首は、西本願寺本系統『斎宮女御集』のみが有する贈答歌二首（二二七と二二八）。しかし西本願寺本とは本文も字母も異なるので、その模写ではない。西本願寺本では二二七番に「堀河中宮つせ給てのころ六条殿にながめかしはをたてまつり給ひて」という詞書があるが、本断簡にはスペースがありながら詞書はない。二二八歌の左の空白も不自然にみえる（文字を擦り消した跡は見当たらない）。二二八歌下句は西本願寺本では「なかめかしはにかゝるつきかな」

とある。以上のことから『斎宮女御集』ではない可能性も残るが、現時点では他文献を見出せない。書写年代は、平安時代書写の古筆切にも見えるけれども、『古筆学大成18』に掲載される伝紀貫之筆本や伝俊頼筆本のような、古い伝称筆者ながら実際は近世期写の類いと判断される。平安期写の断簡とは思われないのだが、いかがだろうか。本展示品の料紙に「コメ澱粉固有の消光十字」が検出できることとの関連も含めてなお検討が必要。

(舟見)

＊参考文献

池田和臣 [2014] 『古筆資料の発掘と研究 残簡集録散りぬるを』青簡舎・第二章第二節
日比谷孟俊・澤山茂・大和あすか [2023] 「国文学・美術とハイテク分析機器」『紙のレンズがひらく古典籍・絵画の世界』勉誠社

#30 頭輔集（左京大輔集）

山岸文庫 (3733)。国書DB・著作ID: 80546。列帖装。一帖。(江戸時代初期)写。伝空性法親王筆。縦21・5×横14・5糎。字高、和歌19・0糎、詞書は和歌より2・7糎下に書く。表紙は原表紙で「深草色、金欄で二重枠内に龍・麒麟紋様のある亀甲地紋」(小島 [1997])。見返しは金箔押。外題なし。内題なし。料紙は厚手で、花唐草丸文などを雲母で刷り出す。○一面10行数・和歌一首2行数。○桐製外函小口に貼紙「乙(朱)印「大六」四六九/左京/太夫集/空性/法親王/真翰」。漆塗内函ウハ書金泥「左京大夫集 空性法親王真翰」。

▼藤原頭輔の私家集。小島孝之 [1997]に影印が公開され、頭輔集の伝本関係についても詳述されている。書写年代は鎌倉中期から末期とされるが、私見では伝称筆者とされる空性法親王と同時期の江戸時代初期頃。短冊と比較すると伝称筆者どおり空性法親王筆ではないか。(舟見)

頭輔について『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、2014)に基づいて述べる。寛治四年(1090年)〜久寿二年(1155年)5月7日没。父は修理大夫頭季、母は藤原経平女。白河院に仕え、保延五年(1139年)に左京大夫に、久安四年(1148年)に正三位に叙せられた。天永四年(1123年)に24歳で歌合を主催して以降、多くの歌合に出詠し判者を務めた。『金葉和歌集』以下の勅撰和歌集に八十四首入集。崇徳院の命を受け『詞花和歌集』の撰者となり、『久安百首』歌人に加えられるなど、歌壇の中心的な歌人として活躍した。息子に清輔、重家、季経らがあり、清輔は『袋草紙』を著し後の二人も勅撰歌人として活躍した。この頭輔の家系を六条藤家と称し、和歌を詠み追究する歌道家としての地位を高めた。叙景歌や述懐歌を多く詠み、「夜もすがら富士の高嶺に雪消えて清見が関に澄める月かな」が代表歌のほか、「秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ」が百人一首に選ばれている。『袋草紙』には頭輔の詠んだ「逢ふと見てうつつかひはなけれどもはかなき夢ぞ命なりける」に、歌人として高名な源俊頼が深く感嘆し、「油で磨いた上に油を塗り完璧に仕上げた歌」と称揚した逸話が残る。自身の実力を「家の風吹かぬものゆゑはづかしの森の木を葉を散らしつるかな」と謙遜しながらも、一歌人としてのみならず、六条藤家の継承に貢献した実力は高く評価された。

『頭輔集』は歌数一四六首。自撰か他撰かについては諸説がある。永久四年(1109年)の鳥羽殿歌合の歌から始まり、末尾に「このち病おもくなりて、五月七日なんかくれ侍りにける」とあるように、頭輔の死に至るまでは年代順に配列されている。中盤までは数々の歌合で詠まれた歌が中心となり、終盤では天皇の即位に際した大嘗会での作や屏風歌、述懐歌という構成をと

る。『久安百首』の歌を収めないなど、頭輔の詠作活動の全てを伝えるものではないが、生涯に渡る頭輔の活躍を伝えるものとして十分な資料である。(新村)

＊参考文献 小島孝之「[397]」『山岸文庫蔵「左京大夫集」影印・解題』『実践女子大学文学芸資料研究所年報』16

#31 再昌草

★解説を大幅に修正 (2024/09/21)

山岸文庫(3784)。国書DB・著作ID: 198005。袋綴。一冊。(江戸時代中期)写。伝靈元天皇筆(山岸識語による)。縦28・5×横21・4糎。字高、和歌22・6糎、詞書は和歌より1・3糎下に書く。表紙は原装三条西家家紋八つ丁子紋型押。見返しは素紙。外題も原装で左肩に双辺枠刷題簽墨書「逍遙院殿内府和歌集」とし、それをミセケチして「再昌草」と墨書。内題なし。楮紙打紙。一面10行書、和歌一首1行書。墨付第一丁オモテ右上に朱陽椿円印「三条西」。表紙右肩に「三五」と墨書した紙片(下部に朱横線あり)を貼付。山岸識語「靈元院御宸筆也」と図書寮本再昌草全同筆云云 再昌草御宸翰有二部者歟／再昌草永正三四年欠本二巻桂宮本叢書所収 図書寮本有奥書／五月卅一日於図書寮与桂宮本比較焉了／昭和二十四年四月二十九日 於琳琅閣求焉 岸迺舍」。

▼三条西実隆の家集。三条西実隆の家集のうち『再昌草(再昌)』の伝本は、靈元院筆書陵部御所本(特・一)、鷹司政通ら筆書陵部鷹司本(鷹・三八四)、柳沢文庫本が知られている。管見の範囲では山岸文庫本に触れた研究は見当たらないので、展示品は新出の一本かと思われる(識者からのご教示をお願いしたい)。

既知の三本は、明応十年から天文五年までの実隆歌を収めるが、御所本は文亀三年ぶんが欠、鷹司本は序文・明応十年〜文亀二年・永正三年・享祿二年以降を欠、柳沢文庫本は永正四年以後は抄出本である。一方、山岸文庫本は永正三年と永正四年の二年分のみからなる。

本書と同じ表紙(および整理番号を記した紙片を貼る)の資料としては、早稲田大学図書館蔵三条西家旧蔵『源氏物語筆者』(K02_04867_0054)ほか、三条西家旧蔵本のなかに見られる。中央大学図書館蔵『詠歌大概』(K911.101/F68)の表紙も同じもの(池田[2024])。朱陽椿円印「三条西」があることから、本書は原装を保つ三条西家旧蔵本とみてよい

山岸が識語に記したように、山岸文庫本の筆跡は靈元院筆御所本と極めてよく似た筆跡である。そのため、靈元院筆の三条西家旧蔵本かと考えてみたが、御所本にある靈元院の奥書がここで問題となる。御所本にある靈元院筆の書写奥書には「……此草者於家最秘藏、曾不許他見之所、以殊忘節令備乙夜之覽、一見之次手自写留之……」とあり、三条西家に秘藏されていた、実隆自筆詠草を靈元院が写したと解釈されている。靈元院は「実隆自筆詠草」を写すとき、『雪玉集』所収歌などは「私く仍除之」などと注記して省略しながら書写している。本書にも同じく「私く仍除之」といった注記がある。そうすると、靈元院が実隆筆原本の一部を略しつつ二度書写し、実隆筆原本がある三条西家へ、自身の抄出転写本一部を渡した、ということになるが、それは不自然かと思われる(靈元院によって三条西家に下賜されたものか)。山岸文庫本が靈元院筆本の模写(つまり御所本の模写)とも考えたが、それが三条西家にあるのはさらに不自然。筆跡が靈元院とは無関係だとしても、靈元院による抄出本の転写本が、抄出まえのかたちの原本を有する三条西家に伝わっている状態をうまく説明できない。なお三条西家旧蔵本の表紙と題簽については、瀧山風氏(総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程)よりご教示頂いた。

(舟見)

＊参考文献

- 日下幸男 [1994] 「柳沢文庫の蔵書と古今伝授の関係」 研修余滴38
 伊地知鐵男 [1996] 『伊地知鐵男著作集〈連歌・連歌史〉』 汲古書院
 井上宗雄 [1997] 『中世歌壇と歌人伝の研究』 笠間書院
 伊藤敬 [2005] 『室町時代和歌史論』 新典社
 『桂宮本叢書十一 私家集十一』 養徳社、1949
 『新日本古典文学大系 中世和歌集 室町編』 岩波書店1995
 『和歌文学大系 草木集 権大僧都心敬集 再昌』 明治書院2005
 池田和臣 [2024] 「中央大学国文学善本解題」 中央大学国文67



(参考) 同紋様の表紙例：国文学研究資料館所蔵『一葉抄』
 国書データベース、<https://doi.org/10.20730/200006811>

#32 (百人一首・三十六人歌合) 冷泉為清筆

常磐松文庫。列帖装。一帖。寛文二年写。冷泉為清筆。縦16・5×横18・0浬。字高14・0浬。原装紺地銀鼠色扇文等綴子表紙。見返しは金箔押。外題なし。内題は「小倉山荘色紙和歌百人一首」「三十六人哥合」。料紙は八種類の加飾料紙(菱形繫刷文や金砂子雲霞文など)と素紙を混用。一面7ゝ8行書、和歌一首2行書。書写奥書「右一冊松室重親依／所望染愚筆／寛文二曆／初冬下旬／左中将藤原為清」。原装鶯色地裂の包みが附属。その貼外題は中央に「小倉百首(附六ゝ謔仙／冷泉為清卿筆)」(加飾)。

▼『百人一首』と『三十六人歌合』を合写した一帖。表紙は原装と推定される。書写奥書によると、本書は寛文二年(1662)に「松室重親」の依頼によって冷泉為清が書写したもの。「松室重親」については未確認。本書の筆跡は定家様で、為清の筆跡と推定される。美麗な装飾料紙からして進物とみてよく、奥書の記述とも合う。(舟見)

＊参考文献

- 中川博夫・田淵句美子・渡邊裕美子編 [2022] 『百人一首の現在』 青簡舎
 木村孝太 [2023] 「『百人一首』 主要伝本翻刻集成稿」 『日本大学大学院国文学専攻論集』 19
 田淵句美子 [2024] 『百人一首 編纂がひらく小宇宙』 岩波新書

#33 清輔家歌合 永暦元年七月

山岸文庫(A389)。国書DB・著作ID:157733。袋綴。1冊。(江戸時代前期頃)写。縦27.9×横20.4浬。字高、和歌一首21.5浬内外。前表紙は原装で素紙に黄檗色丸龍飛雲繫刷文、裏表紙は原装で素紙に紺色手毬四つ割菱唐草繫刷文。見返しは素紙。左肩打付書「清輔朝臣家歌合(永暦元年七月)」(本文別筆)。内題は「太皇太后宮大進清輔朝臣家哥合 永暦元年七月日」。楮紙。一面13行書。和歌一首1行書。山岸徳平筆識語「昭和廿四年三月下浣(琳琅にて)岸迺舎」。表紙右下・前遊紙第一丁才右下・墨付第一丁右下に「山岸文庫」。

▼本展示品について『和歌文学大系』の「中世歌合集」には言及がないので新出の一本か。他の伝本と同じく特筆すべき異同は確認できない。本歌合は、永暦元(1160)年七月成立。『和歌文学

大系Ⅱの『中世歌合集』では、清輔が発案して、二条天皇に近い歌人の歌から選歌し、歌合として構成したものを内裏に送り、二条天皇に近仕した通能と天皇とが判をしたものと考えられている。七十首三十五番の歌合で、歌題は「鶯」「梅」「桜」「時鳥」「織女」「月」「紅葉」「雪」「恋」「述懐」の十題。判者は源通能。「重 勅判也」とあり、これに従えば二条天皇が追判したということになるものの、本文にそれをうかがうことはできない。歌人は、公重・清輔・雅重・頼輔・家基（素覚）・師光・資隆・敦頼（道因）・憲盛・俊恵・祐盛・顕昭・空仁・（殷富門院）大輔の十四名。二条天皇に近い歌人と、歌林苑で交流のみられる歌人が多い。歌数の多寡があり、多いのは清輔・俊恵の十一首、顕昭の八首、敦頼・空仁の七首など。なお、一番左と三十五番右は清輔自身であり、巻頭と巻軸に自らを配している。（中村）

＊参考文献

久保田淳監修 [2024] 『和歌文学大系Ⅱの 中世歌合集』 明治書院
和歌文学大辞典編集委員会編 [2014] 『和歌文学大辞典』 古典ライブラリー（安井重雄 執筆）

34 月卿雲客妬歌合（建保二年九月尽日歌合）

山岸文庫（A388）。国書DB著作ID：169722。袋綴。1冊。（江戸時代中期頃）写。縦28.0×横19.6㎝。字高、和歌一首23.0㎝内外。原装芥子色染紙表紙、見返しは素紙。左肩貼題簽（金泥雲霞草花下絵）「月卿雲客詞合」（後補か、本文別筆か）。内題は「月卿雲客歌合（建保二年九月盡／順徳院哥合）」。料紙は楮紙。一面10行書、和歌一首1行書。山岸徳平筆識語「昭和三十三年四月十六日（斯文会にて）岸廼舎」。墨付第一丁才内題下部・墨付最終丁才に「阿波國文庫」、表紙右下・墨付第一丁才に「山岸文庫」。裏表紙見返しにラベル「193／27／1」（実践女子大学での整理ラベルではない）。

▼阿波国文庫旧蔵本（不忍文庫の印はない）。表紙右上の貼紙「歌書五（朱筆『六』を墨で修正）」「和歌／十七」は阿波國文庫での整理番号。親本に問題があったらしく、二十四番で書写が終わっている。

本歌合は建保二（1214）年九月三十日、順徳天皇の内裏で催された歌合。『紫禁和歌集』『明日香井和歌集』に見える、九月二十五日または二十九日に行われた『月卿雲客歌合』（散佚）の「妬」（報復戦）として催されたとされる。歌題は、「河落葉」「寄鳥恋」「深山雨」の三題三十番。季・恋・雑一題という設題は初見である。判者は家隆。左方に「月卿」と呼ばれた公卿及び女房、右方に「雲客」と呼ばれた四位と五位の殿上人を番えた。歌人は、左方が順徳天皇・権大納言・家衡ら十名、右方が雅経・行能・国通ら十名の計二十名。家隆が判者を務めた数少ない歌合であり、和歌をもって判ずる判歌という形態も注目される。家隆の判歌は、左右歌に配慮し、両歌の詞を活かしながら判定していること、判歌が古歌を踏えていること、の二点に特色がある。家隆が作歌面に重点を置いた自らの歌人歴を自負しつつ試みた積極的な挑戦であり、歌壇における自己表現の一方法であったと考えられている。（中村）

＊参考文献

松井律子 [1999] 「『月卿雲客妬歌合』攷」『就實語文』20
松井律子 [2001] 「『月卿雲客妬歌合』考——家隆の判歌をめぐって——」『就實語文』22
和歌文学大辞典編集委員会編 [2014] 『和歌文学大辞典』 古典ライブラリー（五月女肇志執筆）

#35 (歌合集) 存一二冊

山岸文庫 (A396)。存一二冊。一二冊が共通する書誌事項をまず記す。袋綴。(江戸時代前期) 写。縦26.7×横19.8糎内外。字高は和歌一首22.7糎内外。表紙はすべて原装縹色表紙。見返しは本文共紙。外題は左肩原題簽(黄土色、法量は縦17.4・横3.8糎)に墨書するが虫損甚だしく、題簽の剥がれたものには打付墨書(題簽墨書と同筆のものと、山岸筆とがある)。料紙は楮紙。本文は全冊同筆。前表紙に山岸による所収歌合名が書き添えられている。表紙の朱筆も山岸筆。▼第六冊の表紙に山岸筆にて墨書「九条家本」。『反町茂雄収集古書販売目録精選集』(ゆまに書房、2000) 第四巻所収「九条家本目録」の四七頁にある「歌合部類 一五」が本書に該当するか。表紙の山岸筆朱筆ナンバリングは、「共一五」とあって、「一」にはじまり「一五止」で終わるが、「二」「五」に相当する二冊が現在はない。以下に各冊について簡略に説明する。各冊所収の歌合については『実践女子大学図書館蔵 山岸徳平文庫目録 上巻』(実践女子大学、2020)を参照されたい。

(一) 原題簽上部剥離。

(二) 原題簽上部剥離。

(四) 原題簽剥離。山岸筆「慈鎮七社十五番 / 大比叡 / 小比叡……」

(六) 原題簽「三百六十番哥合」。山岸筆「九条家本」。

(七) 原題簽「右大臣家哥合〈二度〉 / 光明峯■摂政家哥合」。

(八) 原題簽上部と下部剥離。山岸筆が「歌」の字を補う。

(九) 原題簽剥離、題簽の位置に題簽と同筆で打付書「當座哥合〈建保四年〉 / 内裏歌合〈建保二年〉」。右下に山岸筆「二部之中乙」、朱筆で消す。

(一〇) 原題簽剥離、題簽の位置に題簽と同筆で打付書「卿相侍臣歌合」。右下に山岸筆「二部中乙」、朱筆で消す。

(一一) 原題簽「老若哥合」。

(一二) 原題簽上部と下部剥離。右下に山岸筆「二部之中乙」、朱筆で消す。

(一三) 原題簽剥離、題簽の位置に題簽と同筆で打付書「御室撰歌合」(その下の細目は山岸筆)。右下に山岸筆「二部之中乙」、朱筆で消す。

(一四) 原題簽剥離。

(一五) 原題簽「哥合〈文明十年二度〉 / 〈詩哥合〉 / 〈応永十四年〉」。最終丁に山岸筆朱筆識語「歌合虫喰本取雑一括 / 九条家蔵本也 / 大正十三年秋黒門町廣田にて / 求之。」

甲乙トアルハ二冊アリシモノナリ。一部八 / 小川寿一二与ヘタリ」

第十五冊の山岸識語から、九・一〇・一二・一三は二部ずつあったため、甲本を小川寿一へ与え、乙本を手元に置いたという経緯がわかる。幸いにも、このうち九甲本と一〇甲本に相当する写本が早稲田大学図書館の所蔵となり現存している(〈04 08073.1 および2。表紙に山岸筆「二部之中甲」という書き付けがある。詳細は兼築[2000]参照)。一二甲本・一三甲本に相当する本は所在不明。早稲田大学蔵本については幾浦裕之氏(文部科学省・教科書調査官)よりご教示を得た。

ところで慶應義塾大学図書館には、本書と同じ装訂、同筆の打付書外題「前摂政家哥合」を有する、本文も本書と同筆の一冊がある(TOX@650@1)。九条家旧蔵本と考えられるが、表紙などに山岸の書き付けはない。印記「久曾神蔵書」がある。

以上をまとめると、山岸が所蔵していた19点（甲乙の重複含める）のうち、今所在が確認できないものは、山岸が「二」「五」とナンバーを朱筆で表紙に書きつけた二冊（所収歌合は不明）と、山岸が小川寿一に与えた一二甲本と一三甲本である。山岸の手を経していない慶應義塾大学図書館蔵本の存在から、九条家にかつてあった、同装訂・同筆のひとそりの歌合集は、かなりの冊数からなるものであったと予想される。装訂と筆跡に注目してひろく調査していけばその総体は見えてこよう。なおこの点は#38解説も参照されたい。

各歌合の奥書類と現存伝本との関係については精査できていない。善本と目されるものもあり、よしんばその本文がよくある流布本だったとしても、九条家旧蔵の同筆のセットという点を考慮すると、今後は広く参照されてよいだろう。本展示品をデジタル公開し、いま進められている中世歌合のTEI準拠テキストの底本としてもよいかも考えている。（舟見）

＊参考文献

兼築信行 [2000] 「新収の歌書三点 『続古今集』 『雲葉集』 『歌合集』」 『早稲田大学図書館紀要』 47

加藤弓枝・田口暢之・海野圭介・幾浦裕之 「次世代の翻刻校訂モデルを搭載した中世歌合データベースの構築と本文分析の実践的研究」 『日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C) 2022年4月・2026年』

舟見・加藤弓枝・田口暢之・海野圭介・幾浦裕之 [2024] 「特集・座談会 テキストデータのこれから ―歴史と未来をつつみこむTEI」 『武蔵野文学』 72（近刊）

#36 万葉集長歌短歌説

山岸文庫 (A164)。国書DB著作ID: 501906。袋綴。1冊。（江戸時代前期）写。縦27.2×横20.8㎝。字高21.5㎝内外。原装柿渋染焦茶色表紙、見返し素紙。左肩貼題簽に墨書「長哥短詞古今相違事」（本文同筆か）。内題「萬葉集長哥載短歌字之由事」。楮紙。一面行数8行。（奥書）「長歌短歌相違之事中古已来風／月之万人以牙齒以角争一日有客／将此来披看之則以京極黃門／真蹟論彼一難昔年之孤疑忽／解頃日之猶豫既去仰而信之備而／〔虫損〕之存成懇望倚閑窓写之数回／遂考合畢／ 寛文四年臘月廿五日」。表紙右下・墨付第一丁右下に「山岸文庫」。

▼定家著『万葉集長歌短歌説』の写本。奥書は書写奥書と判断した。やや定家様にもみえる文字でゆったりと書写しており、朱筆合点などを施す。定家自筆本に発する奥書をもつ写本としては、浅田 [2012] の指摘する九州大学図書館細川文庫蔵「長歌短歌古今相違事」(545子8)の奥書にみえる寛文六年(1666)が最も古いとされる。展示品の寛文四年はそれを二年遡る。当該作品の伝本をすべて確認できていないが、注意してよい写本と推測されるため展示した。識者によるご教示をお願いしたい。（舟見）

＊参考文献 浅田徹 [2012] 「堂上から地下へ―典籍の流出・提供・活用」『調査研究報告』32

#37 万葉抄（宗祇抄）

山岸文庫(五三八八)。袋綴。一冊。（享保三年以前）写。縦二六・八×横二〇・六㎝。字高、和歌は二四・五㎝。注文は二三・〇㎝。改装表紙。見返しは墨なし、装飾なし。外題は左肩に題簽

「万葉集注抜書」（本文と別筆か）。内題は一行目に「万葉集注抜書第一」とあり。料紙は楮紙。一面一二行書、和歌は短歌一首一行、長歌一首五行。（本奥書）「〈本云〉弘治元年卯月上州下向之折節遊行廿九／代人厩橋光明寺御念仏中千句御興行／切之遂向顔歌道之申御法会次後撰正義／預御懇智難去而会へ出」遂然者此抄可書写之／御頃許不待時刻次他筆書写之枕」（※この段落、切り貼りして裏見返しに貼り付けてある。貼り付けてある紙の内側に墨・文字なし）。「享保〈三歳〉戌春宿にて求ルもの也／書物奉行頭書住為（花押）」（※この一文、本文とは別筆）。表紙右下に「山岸文庫」あり。一紙オモテに「山岸文庫」および「岩本竹齋章」あり。

▼《本書の概略》

本書は「万葉集注抜書」と題されており、「万葉抄」または「万葉集注抄書」、「宗祇抄」として知られるものである。著者は連歌師宗祇である。宗祇は、慶応二八年（一四二二）の生まれであり、文亀二年（一五〇二）に八二歳で病死した。本書「万葉集注抜書」および「万葉抄」に宗祇本人の署名はないが、宗祇の作であることは、諸本の奥書に「宗祇法師抄也云々」「右此抄出為連歌之宗祇注了」との記載があることから認められている。

《成立年代》

「万葉抄」の成立年代は不明とされるが、水戸の彰考館所蔵本の奥書に文明一四年二月二四日宗誕生書写と記されたものがあることから、文明年間には成立していたと考えられている。具体的には、文明六（一四七四）から文明一四年までの成立かと目されている。

《内容》

宗祇「万葉抄」は、「万葉集」の歌を一首ずつ掲載し、その上で各歌に対して注釈を施す。注釈は、仙覚「仙覚抄」や由阿「詞林采葉抄」からの引用が多いことが指摘されており、そのうえで、宗祇自身の説を示した箇所も少なくないものとされる。「万葉抄」収載歌の選別や注釈の内容については、鑑賞に主眼が置かれており、「万葉集」の歌が和歌や連歌の創作にどのように活用されたらよいかという態度に基づくものであると指摘される。

《諸本および奥書》

諸本としては、広本・略本の二つの系統があり、奥書は幾通りのものが存在している。広本は「万葉集」原本から四分の一ほどの一二〇首弱の歌を抄出し、そのうちの三分の一程度の歌に注を加えたものである。略本は、広本の有注歌の部分を主に抄出したものではあるが、現存広本に見られない独自異文を持っている点が貴重であるとされる。そのいずれにおいても、「私云借用註本是迄少々書寫侍ぬ」から始まる奥書がある。さらに流布本系統には「文亀二年二月五日於越後國府中旅窓寫畢」の文言が記されるが、本書「万葉集注抜書」には、その文言は記されていない。

奥書の内容については、現在よりも大部であった宗祇「万葉抄」から、現存の広本のような形に筆者が抄出した際のものともみるのが通説であった。その一方で、「万葉抄」原著はすでに抄出本であり、「万葉抄」の本文や奥書に見える「私云」は「宗祇云」の意味である解釈する説が提示され、その説が現在は支持されている。なお、広本と略本の関係については、広本が写し伝えられる間に、さらにそれを抄出した略本が生じたと考えられている。ただし、宗祇の自筆に依った写本は、確認されていない。活字本は、佐々木信綱編『万葉学叢刊、中世篇』（万葉集叢書、古今書院、昭和三年）の所収本が唯一のものである。この底本は広本の雀軽子書写本であ

り、「万葉抄」と題されているため、これが原本の名称であろうとされる。原理的には、広本からの抄出本（略本）が、のちになって「万葉集注抄書」などと名づけられたと考えられている。

なお、「万葉抄」以前には、宗祇による抄出本の「万葉集」の存在したことが想定されている。本書の「万葉集注抜書」と書名が類似する「万葉集抜書」がそれに該当すると見られている。「万葉集抜書」は、注釈の数が極めて少なく、注釈への意識が希薄であると指摘されていることから、本書とは別物であると考えられる。

《表記》

本書の歌本文の表記については、「万葉集」の漢字本文をすべて漢字仮名交じりの読み下しに書き換えられている点で、興味深い。訓みとしては、おおよそ仙覚の新品に従っているが、「万葉集」本文から離れた訓みが散見するとも指摘される。

《書き入れ》

また、本書には、本文とは別筆と思われる墨の書き入れが多数存在している点、近世における万葉歌の享受の様子が垣間見える。

《本書の特徴》

本書の本奥書には、「弘治元年」（一五五五年）云々の記載が見え、「万葉抄」の成立に比較的近い時代の写本が親本であると認められる。なお、「弘治元年卯月上州下向之折節」云々とある本奥書は、切り貼りして裏見返しに貼り付けてある。貼り付けてある紙の内側に墨・文字はない。また本奥書と本文とは同筆とみなせる。そのことから、「弘治元年卯月上州下向之折節」云々とある本奥書は、裏表紙や紙がばらけた際に、その箇所のみを切り取り、新しい裏表紙に貼り付けたものと考えられる。裏表紙には、さらに、「享保（三歳）戌春宿にて求ルもの也／書物奉行頭書住為（花押）」とする所有者として記した一文があり、これは本文および本奥書とは別筆である。（軽部）

＊参考文献

- 佐々木信綱編『万葉学叢刊、中世篇』（万葉集叢書、古今書院、一九二八）
小島吉雄「宗祇と兼載との万葉集研究」（『万葉集大成』第一巻…特殊研究篇、平凡社、一九五五）
両角倉一「宗祇の万葉集享受…『万葉抄』その他」（『連歌俳諧研究』六二、一九八二）
景井詳雅「『万葉集抜書』と『宗祇万葉抄』との関係…中世『万葉集』享受の基礎的研究のために」（『万葉古代学研究年報』一七、二〇一九）

#38 願注密勘 残欠本（中・下巻）

山岸文庫（5424）。袋綴、2冊。（寛永六年（1629）写か・寛永六年校合）。縦26・4×横20・4糎。字高は23・0糎、願昭注文は和歌より1・7糎下に、定家注文は3・2糎下に書く。原装縹色表紙、見返しは素紙。左肩黄土色原題簽に墨書「願注密勘（中）」「願注密勘（下）」。「内題は「古今和歌集巻第」」。料紙は楮紙。一面11行書。奥書・識語については後述。印記は表紙右下に「山岸文庫」。

▼『願注密勘』の中・下巻のみの残欠本。表紙および題簽の筆跡が、九条家旧蔵本とされる#35〔歌合集〕と一致するので、こちらも九条家旧蔵本と推定される。上巻を欠くが、『古今集注釈書伝本書田』59頁掲載の、「九条家旧蔵、松田武夫、山岸徳平旧蔵本」という個人蔵の上巻一冊（巻一〜一〇）は展示品の僚巻か（未見）。『反町茂雄収集古書販売目録精選集』（ゆまに書

房、2000）第四卷所収「九条家本目録」の四七頁にある「顕注密勘 二」がこれに該当するか。なお「九条家本目録」については瀧山嵐氏のご教示による。

中巻末に、京大中院文庫蔵本（中院Ⅱ25）と同じ本奥書があり、最終丁左端に「寛永六年（己／巳）卯月吉辰一校了 兼孝／吉信」という校合奥書がある（本文同筆）。「兼孝」は九条兼孝（1553～1636）か。書写奥書はない。下巻には、承久三年三月定家奥書、承久三年十月藤原某奥書、弘安三年八月慶融奥書、兼良奥書、内大臣藤原某奥書（植通か）がある。そして最終丁左端に「寛永六年（己／巳）卯月十二日一校了 兼孝／吉信」という校合奥書がある（本文同筆）。書写奥書はない。校合奥書が本文と同筆であるため、校合と同時期の書写と判断した。寛永の校合奥書がいはいは京大中院文庫蔵本（中院Ⅱ25）と同じであり、本文も巻十五・七七三番歌注文が「……師説にあらざれば定めがたし」とあるので、海野〔1996〕がいう流布本系統Ⅰ類aに属するものと推定される。（舟見）

＊参考文献

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫〔2007〕『古今集注釈書伝本書目』勉誠出版
海野圭介〔1996〕「顕注密勘伝本考」『古代中世文学研究論集 第一集』和泉書院

39 （古今和歌集間書） 五冊

山岸文庫（3584）。本書の書誌事項は左の先行研究を参照されたい。

西澤美仁・牧野和夫・杉山友美〔1998～2002〕「山岸文庫蔵『古今和歌集間書』翻刻（一）～（四）」『文芸資料研究所年報』17.18.20.21

奥書は第五冊尾題後に「万里小路親房作也」「右古今の注種々致懇望令害写者也いさ上かも／他見あるましきものなり／寛永拾九年七月十六日／右ノ以本寛文四年秋下旬令書写者也」。その左下に別筆で「円蔵房元超（花押）」と墨書。これは表紙左下「元超蔵」とある墨書と対応。第一冊の右肩に「九條家旧蔵本」と山岸徳平筆墨書。

▼三流抄と弘安十年歌注からなる古今集注。翻刻が西澤美仁・牧野和夫・杉山友美〔1998～2002〕として公開されている既知の資料だが、現物の公開はこれまで殆どなかったかと思われる。山岸が「九條家旧蔵本」と表紙に書きつけているが、九條家旧蔵本である#35・#38とは表紙が異なる。また題簽はなく、打付書の筆跡も前記2点と異なる。九條家旧蔵本とする根拠は不明だが、『反町茂雄収集古書販売目録精選集』（ゆまに書房、2000）第四卷所収「九条家本目録」の四六頁にある「古今和歌集 五」がこれに該当するか。なお山岸文庫には、九条家旧蔵本や山岸が九条家本を転写した現写本が他にも数点確認できる。山岸文庫に蔵されるこれら九条家旧蔵本関連資料については共同調査を継続していく予定。（舟見）

＊参考文献

横井孝〔2018〕「実践女子大学図書館山岸文庫蔵本奥書識語編年集成」『実践女子大学文芸資料研究所年報』37
慶應義塾大学附属研究所斯道文庫〔2007〕『古今集注釈書伝本書目』勉誠出版

#40 (古今和歌集注) 零巻 伝素眼筆

山岸文庫(A14)。卷子装。二軸。(南北朝から室町時代初期)写。伝素眼法師筆(巻第十七巻頭の極札による)。一紙の大きさは縦23・0x横17・0糎。字高は和歌一首21・0糎(詞書は和歌より2・2糎ほど下に、作者名は11・5糎ほど下に書く)。注文は和歌から0・5糎ほど下に書く。もと冊子本を卷子装に改装。表紙は卍繋ぎ・龍・吉祥文・飛雲などを織り込んだ段紋様錦。見返しは布目地金箔。外題なし。内題「古今和詞集巻第十七(十八)」。「料紙は楮紙。一面10行、和歌一首1行書。奥書・識語なし。現代製桐函。巻第十七冒頭の継紙に「素眼法師(琴山)」(古筆了佐か)

▼既存の目録上では『古今和歌集』となっているが、古今集本文をとまなう注釈書である。素眼を伝称筆者とする典籍は複数残っているが、その筆跡は一樣ではなく、近似注目されている伝素眼筆『菟玖波集』と本書は別筆である。かといって本書が素眼真筆である確証はない。

本書は、『古今集』の詞書、作者、和歌に対して、特定の人名や場所、時期などをあてながら説明し、本説をもって説明する箇所もある。いわゆる毘沙門堂本古今集注やその類書のなかに、よく似た言説はあるけれども、本書と記述内容が一致する特定の伝本(注釈書)はいまのところ見当たらない。現時点では僚巻やツレの古筆切なども見出せていない。新出資料であるため今回展示することにした。ご教示をお願いしたい。(舟見)

*参考文献

国文学研究資料館編 [2018] 『中世古今和歌集注釈の世界―毘沙門堂本古今集注をひもとく』 勉誠出版

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 [2007] 『古今集注釈書伝本書目』 勉誠出版

舟見 [2016] 「毘沙門堂本古今集註とその類本について―伝本の整理を中心に」『国語国文 85』12

小川剛生 [2022] 「菟玖波集の本文について 新出の素眼本巻十五と急雨亭文庫本(渡辺本)の考

察」『藝文研究』123-1

小川剛生、浅井美峰 [2023] 『菟玖波集(上) 中世の文学』三弥井書店

河田翔子 [2024] 「新収の古今注 伝轉法輪公敦筆『古今和歌集注』の紹介」『書物学』

Bibliology』125、勉誠社

第九章 筆跡や料紙を愛でる、集める ―古筆手鑑―

#41 古筆手鑑 一帖

本手鑑に銘はない。オモテに古筆切四〇葉(うち一葉は模写)、ウラ面に短冊や色紙を六一葉貼り込む。手鑑の配列は、勅筆からはじまるが、自由な箇所もある。各所に張り替え跡があり、原型を留めてはいない。経切が一葉もない点は特徴。また、筑後切、浅井切、秋田切(鯉切とも)、伊勢切、安芸切といった名物切が含まれている。源氏物語梗概書や大和物語、僻案抄、未詳古今集注、拾遺愚草、秋篠月清集といったやや珍しい古筆切も多く、国文学研究上、有益である。裏面のなかにも、後花園院勾當内侍の自詠自筆と目される、ちらし書きの短冊や、美麗な加飾古歌短冊、色紙類が多い。極札は古筆本家、別家、朝倉茂入、藤本了因、浅井不舊など多様で

ある。ところどころに、古筆了音に筆者について質問し、了音が是と答えたと記す紙片が張り込まれている。

本資料の詳細は、後日、別府節子氏（文芸資料研究所客員研究員）、上野英子氏（文芸資料研究所教授）と舟見の連名で報告する。本解説も二名の共同研究の成果である。（舟見）

第一稿 2024/09/09
修正 2024/09/21